

ミツバチストーリーズ2

「やさしい養蜂」が、障害者と地域の可能性を広げる

農福連携養蜂事例集



発行・編集

一般社団法人トウヨウミツバチ協会

〒104-0061 東京都中央区銀座3-9-11 紙パルプ会館

Tel:03-6277-8000 Fax:03-6277-8888

Mail:ginzainitiative@gmail.com

発行日:2021年12月4日

編集協力:株式会社ランドマーク

※本事業は、日本中央競馬会(JRA)畜産振興事業の助成により実施されます。

※本書で使用している文章・画像等の無断での複製・転載を禁止します。



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業



「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」について

日本中央競馬会（JRA）畜産振興事業の助成を受けて、令和2～3年度「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」を実施しました。この事業は、障がい者が養蜂現場に障がいの程度に応じて参画するため、適切な技術指導や知識の習得だけでなく、現場での実技指導が不可欠であることから、近隣の養蜂家から直接定期的に指導を受ける一方、専門家とともに技術習得の過程改善や労働参画意欲の向上、一般就労への移行の可能性などを検証し、その成果を公開すると同時に、現地での検討会や全国規模の報告会を開催する事業です。この研究事業には、北海道から沖縄県まで全国13カ所の就労支援事業所に参加いただき、40名の精神・知的障がい者が養蜂作業に参画し、32名が一定の養蜂技術を身につけました。

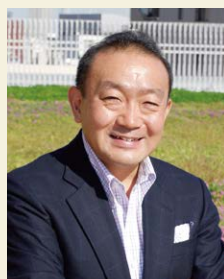
当団体では、平成29～30年にも日本中央競馬会（JRA）畜産振興事業の助成を受けて「障がい者が参画する養蜂環境の調査研究事業」を実施し、予備調査を含めると精神・知的障がい者の養蜂への取組に対する調査研究を6年間継続してきました。その実績と経験を踏まえて、「ミツバチストーリーズ2」障

がい者養蜂飼育事例集として、各地での取組を紹介すると同時に、障がい者が養蜂技術を習得する上での大切なことや、その結果得られる労働参画意欲及び、いきがい、健康増進を含むQOLの向上について、さらに事業性や一般就労への移行の可能性について検証結果を報告していきます。

また、精神・知的障がい者はその日の体調やアンケート調査やインタビューの環境によっても回答に変化があることから、養蜂でのストレスを可視化するために専門家（医療研究者）の指導を受けて唾液アミラーゼ値の測定や、心療内科医の監修を受け、自律神経測定を実施し、養蜂作業でのストレス及びストレス緩和効果を検証しました。

その結果、社会福祉の研究者や心療内科医から、今後の養蜂での動物介在療法（AAT）や動物介在活動（AAA）についての調査研究に期待が寄せられています。本事業では、その予備調査の役目も十分果たしたと確信しています。

この調査研究事業が養蜂を通した畜産振興の一助となれば幸いです。調査研究事業へ助成をいただいた日本中央競馬会（JRA）に心より感謝申し上げます。



令和3年12月吉日
一般社団法人トウヨウミツバチ協会
代表理事 高安和夫

ミツバチストーリーズ2

「やさしい養蜂」が、障害者と地域の可能性を広げる／農福連携養蜂事例集

02	各地の取り組み
	農福連携養蜂事例紹介
04	事例① 株式会社楽ワーク福祉作業所（沖縄県・南城市）
10	事例② TEAM VILLAGE 合同会社ソルファコミュニティ（沖縄県・北中城村）
16	事例③ 企業組合労働センター事業団就労継続支援B型事業所ほのぼの（鹿児島県・霧島市）
22	事例④ 社会福祉法人あすなろ学園 障害者支援施設母原（福岡県・北九州市）
28	事例⑤ 特定非営利活動法人スマイルベリー（静岡県・浜松市）
34	事例⑥ 名身連第一ワークス・第一デイサービス（愛知県・名古屋市）
38	事例⑦ 社会福祉法人筑峯学園 障害者支援センター未来（茨城県・つくば市）
	現地調査報告
42	報告① 株式会社Seed 多機能型事業所Seed（北海道・札幌市）
44	報告② 埼玉福興株式会社 特定非営利活動法人 Group Farm（埼玉県・熊谷市）
46	報告③ 公益財団法人柿葉会 神奈川診療所（神奈川県・横浜市）
48	報告④ 特定非営利活動法人EPO（静岡県・富士宮市）
50	報告⑤ 特定非営利活動法人森の学校（福岡県・豊前市）
52	報告⑥ 株式会社リーフエッジ あまみん（鹿児島県・龍郷町）
54	報告⑦ しんじゅQuality みつばちプロジェクト（東京都新宿区）
56	報告⑧ 株式会社エールアライブ（北海道札幌市）
58	報告⑨ 特定非営利活動法人はあもにい（千葉県千葉市）
	調査・研究
59	養蜂技術習得について
60	労働参画意欲及びQOLの向上について
65	事業性、一般就労移行への可能性
66	シュタイナーの思想に基づく児童の療育としての養蜂活動／衛藤吉則
68	養蜂—新たな農福連携・障がい者支援への具体策／溝口元
71	取組の魅力は、「みんなの笑顔」です／春日住夫
72	ニホンミツバチでの養蜂指導／舩本哲也
74	知的・精神障がい者の養蜂作業前後での唾液アミラーゼ測定結果の分析／千葉吉史
76	知的・精神障がい者に対する養蜂作業前後の、唾液アミラーゼによるストレス分析／中城基雄
78	知的・精神障がい者の養蜂作業前後での自律神経測定結果の分析／降矢英成
80	養蜂や関連する農作業（蜜源植物栽培・管理）での心のケアについて／末松広行
81	あとがき

各地の取り組み

今回事業に参画してくださった、全国の施設です。



奄美大島

株式会社リーフエッジ
あまみん(就労継続支援B型)
(鹿児島県奄美市)

P.52



沖縄

ソルファコミュニティ
(沖縄県中頭郡)

P.10



楽ワーク福祉作業所
(沖縄県南城市)

P.4

社会福祉法人あすなろ学園
障害者支援施設母原
(福岡県北九州市)

P.22

企業組合労働センター事業団
就労継続支援B型事業所
ほのぼの
(鹿児島県霧島市)

P.16

特定非営利活動法人
森の学校
(福岡県豊前市)

P.50

株式会社Seed 多機能型事業所Seed
(北海道西区)

P.42

株式会社エールアライブ
(北海道札幌市)

P.56

名身連第一ワークス・
第一デイサービス
(愛知県名古屋市)

P.34

埼玉福興株式会社
特定非営利活動法人 Group Farm
(埼玉県熊谷市)

P.44

しんじゅQuality みつばちプロジェクト
(東京都新宿区)

P.54

社会福祉法人筑峯学園
障害者支援センター未来
(茨城県つくば市)

P.38

特定非営利活動法人はあもにい
(千葉県千葉市)

P.58

公益財団法人柿葉会
神奈川診療所 精神科デイケア
(神奈川県横浜市)

P.46

特定非営利活動法人EPO
(静岡県富士宮市)

P.48

特定非営利活動法人
スマイルベリー(静岡県浜松市)

P.28

“ チームワークと役割分担で、 楽しく養蜂活動 ”

沖縄県南城市。沖縄本島の南部に位置し、那覇からも遠くありません。近くの花からの風が吹く高台で、楽ワーク福祉作業所の養蜂は行われています。今日作業を担当するのは、4人の利用者。みんなで車に乗って、事務所から少し離れた場所にある巣箱に向かいます。車から降りると、みんな誰かから指示されることなく、自然に自分の持っていくべき荷物を持っていく。ある人は継ぎ足すための巣箱を、あ

る人は燻煙器を、といった具合。巣箱についても、職員さんや指導員さんがなにか言う前に、みんなそれぞれの役目がわかっているようで、粛々と作業しています。今日、内検を担当するのは宮城登さん。真剣な表情で、女王バチを探します。見つかるのとホッとしたような笑顔。そばで見ている養蜂指導員の新垣さんも、あまり多くは語らず、みんなの作業をじっと見守っています。

ハチとお話ができるようになりました

養蜂作業に参加した4人のみなさんにお話を聞きました。普段は、エコクラフトのかばん製作の仕上げ工程を担当しているという仲村みゆきさん。「はじめは、みつばちが怖かったです」と話してくれましたが、今では「刺されない」という気持ちになってきたそうで、「養蜂が楽しい」と言います。作業はチェックシートを確認しながら行っていて「チェックシートがあることで助かっています」。作業服を着ての作業になるため、時々前がみえなくなるのが困ったところだそうです。採れたはちみつをお母さんに食べてもらったら、「おいしかったよ」と言われて嬉しかったよ、と笑っていました。

友利美香さんは、普段はエコクラフトでみかんかごをつくったり、農作業の加工を担当しています。養蜂をはじめたときは緊張したそうですが、今では楽しく作業できていると言ってくれました。自然に触れる機会が増えて、花の見方が変わったそうです。

新垣恵美子さんも、普段はエコクラフトと野菜の出荷作業をしているそうです。みつばちを見たときは、最初怖かったけれど、だんだん慣れてきたそうです。できあがったはちみつをみんなに食べてもらいたいと思うようになったと話してくれました。

宮城登さんは、「最初は養蜂が難しかった」と言います。でもだんだん、ハチが可愛くなってきて、なんと今では「ハチと会話ができるようになった」と言います。どんな会話を？ と聞くと「かわいいねえ、と話しかけてます」と笑います。



チェックシートで作業を共有したら、
チームワークが生まれた

養蜂指導をする、首里の新垣養蜂園の新垣伝(つとお)さん。2年前から楽ワークでの養蜂指導を行っています。「すごい楽しいです(笑)」と言います。「指導をはじめた2年前はちょっと距離があったけど、だんだん利用者さんがハチにも慣れて余裕が出てきたこともあって、次第にいい関係性ができてきた」。利用者さんに養蜂作業について慣れてもらい、自分で次の作業を考えながら動いてもらえるようにと工夫したことの一つが「チェックシート」だったといいます。「その方が作業がわかりやすいかな、と思ってはじめましたが、チェックシートを介してコミュニケーションができるようになったことも大きいですね。以前は作業しっぱなし、やりっぱなしという面もありましたが、シートを見ながら『こうじゃないか』『いやこのほうがいい』と話しあう関係性が生まれて、自然とチームワークが生まれました」。チェックシートでは、ハチの数、女王の有無、王台の有無などを調べます。「たたき台をつくって、作業しながら改善していききました」。今までは作業者と指導者の一対一だったのが、関係性が一対多になって、「みんなで女王を探そう!」といったことができるようになったといいます。「今日の作業で『はちみつが重い』と言っている利用者さんがいたんです。僕なんかは普通にできてしまいますので気づきませんが、利用者さんの目線に立って見て、あらためてそうした個々の作業の強度について考えてみることも必要な、と思っています」と新垣さん。様々な人が自分なりに作業に

関われる、いわば「ユニバーサル」な養蜂を目指すというわけです。「どういうふうにすればいいのかはまだわからないんですけど、それができたら、僕がおじいちゃんになっても養蜂続けられるかなって枠が引き抜きやすい箱とか、いろいろ工夫できるところがありそうです」と今後について話してくれました。

ハチと触れ合うことが、
利用者の心のケアになる

楽ワーク福祉作業所の玉城達矢さんは、「新垣さんは、利用者さんともかなりいい関係をつくっていただいていると感じます。定期的に来てくださることも、利用者さんにとってはモチベーションにつながっているようです」と話します。「チェックシートを使うことで利用者さんが自分でなにをすべきかをきちんと意識できるようになりました。今後はこれをより突き詰めて、よりよい作業管理ができるようにしていきたいと思います」。来年度以降は、「養蜂は生き物を扱うので、日々変化するという点が、他の作業と違うところです。利用者さんの方でも気持ちの変化などがあり、それが作業に反映されます。その点には気を付けていますね」。利用者のみなさんは他の作業をメインの担当として持っており、養蜂は気分転換的な位置づけの作業だといいます。「今後は巣箱を増やそうという考えもありますが、他の作業との兼ね合いも考えながら、無理のないように進められれば、とも思います。外に出てハチと触れ合いながら作業することが、心のケアになる利用者さんもいらっやいます。そうした方が多くなるようでしたら、養蜂を拡充していくことも検討したいと思っています」。





施設紹介 | 株式会社楽ワーク福祉作業所

この株式会社楽ワーク福祉作業所は2013年に設立し、就労継続支援A型(定員12名)、就労継続支援B型(定員20名)の通所の施設として福祉サービスを行う。就労継続支援A型のメンバーは小松菜の生産に力を入れ、日々の生産量も増加。200kg/日(2.5t/月)程度を安定して出荷することができるまでになり、農業の利用を減らす減農薬栽培にも取り組んでいる。その他、パッションフルーツやバナナなどの果樹栽培にも取り組む。就労継続支援B型のメンバーは、「なんじいストラップ」などエコクラフトづくりや野菜

や果樹の選別、ハーリーバジル栽培に取り組む。

この施設における養蜂は、平成29年JRA畜産振興事業で実施した「障がい者が参画する養蜂環境の調査研究事業」の試験飼育に参加し、南城市玉城地区で養蜂を始めた。

養蜂作業は、就労継続支援B型のメンバーから希望者をつのり、手を挙げた20代から60代の男性1名、女性3名が参加している。南国沖縄ならではのちょっと酸味の効いたフルーティーな味わいが特徴の「琉球百花はちみつ」は、南城市の特産品を認定する「沖縄

南城セレクション2018」を受賞する。また2019年には沖縄のオオバギという植物から集めるプロポリスを採取し「琉球百花プロポリス入りはちみつ」を商品化。2020年にはハチミツとパッションフルールを使ったフルーツビネガー「美ら酢」を商品化し、「沖縄南城セレクション2020」や「おきなわ島フードグランプリ奨励賞」を受賞した。

養蜂に取り組む体制も強化した。養蜂担当スタッフも上原隆之さんが参加し2名となる。また、加工部門を分けて、スタッフの與那嶺明美さんと2名のメンバーが担当する。そして「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」参加し、新垣伝氏(新垣養蜂園代表)が指導に来てくれることでメンバーの養蜂に対するモチベーションも上がった。2021年5月6日に実施した技術習得についてのアンケート調査でも、管理や生産

の基本作業の90%以上「できる」という回答であった。「できない」という項目は、「産卵を見つけることができる」など一定以上の視力と集中力を必要とする作業であった。

2021年度は、5カ所の養蜂場で、20群飼育する。ハチミツの収穫量は10月末時点で103kgと順調に推移している。2020年度は約100kgの蜂蜜を収穫し、養蜂での収益も170万円になり、わずかではあるがメンバーの工賃向上も実現できたようだ。今年はさらなる向上も期待したいが、それ以上に、メンバー一人ひとりのモチベーションの向上がうれしいという。

養蜂に参加したことで、メンバーの自立した生活への自信と、商品が地域で評価されていることで仕事への誇りが感じられる。



事業所ですが、農業と同時に養蜂も行っています。今日は養蜂作業の日。朝、事務所から車に乗って、巣箱まで移動します。

今日養蜂作業をするのは、林さん、池間さんの2人の利用者と、ソルファコミュニティ代表の玉城さん、養蜂担当・松田さんの4人。さらに養蜂指導者として、池宮崇さんが加わります。

海沿いの事務所から車で10分ほど内陸に入った森の中に、巣箱はあります。コーヒー畑の奥、ジャングルのような密林の手前に、4群の巣箱が置いてあります。現地につくと、作業服に身を包んで、養蜂作業をスタート。おびただしい数のハチが飛び交う中、それぞれが淡々と自分の役割を果たしている、という感じで作業は進むのですが、特に中心的に作業していたのが林さん。巣枠を持ち上げ、様子を観察しながら、池宮さんや松田さんとも意見交換し、内検作業を進めていました。

印象的だったのは、林さんが内検を終えた巣箱にフタをしたあと、フタの上を軽くポンポンと叩いていたこと。ハチに対するやさしさ、愛情が感じられました。

養蜂作業のあと、蜜でいっぱいの巣枠を事務所に持ち帰ってきました。これから遠心分離機で蜜を搾ります。事務所の前に遠心分離機を出して、巣枠を次々と入れていきます。「なにに？」と、普段は養蜂と関わりのない職員や利用者も出てきて、ちょっとしたイベントのようなにぎわいに。林さん、池間さんが協力して遠心分離機を回すと、下の蛇口からタラ〜っと蜜が出てきます。すると見ていたみんなから「わあーっ」と大きな歓声。こころなしか、採蜜作業をする二人の笑顔も誇らしげです。

ハチミツが採れたら、それだけ楽しい

利用者の中で中心的に養蜂作業に関わり、内検も担当していたのが林さん。普段は農作物の水撒き、収穫、草刈りなどの作業をしているといいます。「養蜂は楽しいですか？ そこそこですね」と笑います。最初は「これでどれだけの蜜が採れるかな」と

巣箱をやさしく「ポンポン」と叩く

強い日差し、今日も暑くなる。5月の沖縄は梅雨入りする直前でしたが、夏のような天気。沖縄県北中城村にある合同会社ソルファコミュニティは、無農薬・無肥料の自然栽培で農業を行う就労継続支援A型

CASE

合同会社ソルファコミュニティ

沖縄県・北中城村

“ コーヒー畑の奥にある、
南国の養蜂場 ”

疑問でしたが、「仕事だからやります」と、養蜂作業に関わるようになりました。「養蜂をはじめようになってから、普段の生活の中でもハチをよく見かけるようになりました」と話してくれました。「まだハチの卵がよく見えてないんです」と自分の課題を話してくれました。

池間さんは、養蜂に関わるようになってからちょうど1年が経ったといいます。「ハチの仕事にはまだ慣れてない」といいます。「ハチには何回か刺されたけれど、あまり気にしていない」と笑います。養蜂だけでなく、農作業の最中にもハチに刺されることがあるので、慣れている、といいます。養蜂は「農業よりも細かく（作業を）やっていかないといけないので、覚えるまで時間がかかる」と言います。「ハチミツが多く採れたら、それだけ楽しい」という池間さん、今日採れたハチミツはどうでしたか？ と聞くと「甘いよ」と笑顔を見せてくれました。

養蜂をしていると、 自然に言葉が出てくる

ソルファコミュニティに養蜂を指導している池宮崇さんは、恩納村ではちみつを販売するカフェ「Honey Bee 蜂優（フォーユー）」の代表をつとめるかたわら、農家や漁師など、地域の人たちに養蜂指導をしている。「首里の新垣さん（『楽ワーク』の養蜂指導をしている新垣養蜂園の新垣伝さん）の紹介で、ソルファコミュニティでも養蜂指導をするようになりました」。

「養蜂をする上での環境はバッチリだと思いまし



た。中城、北中城は沖縄本島の中でもハチの生育がよくて、蜜源もいいんです。ただ、去年はハチに餌をあげないで養蜂をしていたんですね。ソルファさんではその方が自然なやり方だと考えていたようです。私も自分の巣箱では餌をあげていないのですが、やっぱりもっと蜜が採れたほうがいいよね、ということで、スタッフとも話して、蜜をしぼる時期だけは餌を控えて、それ以外の時期には餌を与えるようにして、もっとたくさんの蜜が採れるようにしました」（池宮さん）。障害のある人に養蜂を指導した経験はなかったという池宮さんですが、「細かく教えていけば、ちゃんと理解してくれるので、そこは普段の指導と大きくは変わりません。たとえば林さんなんかは今、自分で言葉を発しながら内検をするようになりました。養蜂をしていると自然と言葉が出てくるようです」。むしろ一般の人よりも覚えが早いのでは、と池宮さんは言います。「最近、僕はただ見守っているだけで、安心して任せられるようになっていますね」。「今後は、新しく養蜂作業に入った利用者を、林さんが指導する、利用者同士で教え合うこともできるんじゃないかと思っています」。

養蜂担当の松田さんは「今後、巣箱の数も増やしていけばいいなと思っていますので、林さんのように養蜂ができる人をどんどん増やしていきたいなと思っています。技術力を高めていけば自然と巣箱の数も増えていって、養蜂ができる人が増えていくんじゃないかな」と今後の展望を話してくれました。

楽しい「イベント」でモチベーションアップ

代表の玉城卓さんは「野菜も収穫して持ってきたりするんですけど、ハチミツの採蜜はイベント感がある（笑）。その点でモチベーションアップができるかなと期待しています。普段の作業ってどうしてもマンネリ化してしまうので、アクセント的にイベントが入ってくれば、養蜂に関わっていてもいなくても、みんなにいい作用があるんじゃないかなって期待しています」。





施設紹介 | TEAM VILLAGE 合同会社ソルファコミュニティ

沖縄県北中城村、合同会社ソルファコミュニティは、2012年12月に設立し、「福祉と農業のマッチング 自然栽培で自分もみんなも健康に」をテーマに、無農薬・無肥料・無除草剤での自然栽培で野菜づくりをしている。チームビレッジは就労継続支援A型事業所で、人にも環境にもやさしい農業を通じて、全ての人がありのまま笑顔になれるコミュニティづくりを目指している。ここは利用者18名の通所の事業所で、すべての利用者がほぼ毎日通い、草刈りや農作業に従事している。養蜂作業には30代～60代の男性3名

が参加している。

この施設における養蜂は、平成29年JRA畜産振興事業で実施した「障がい者が参画する養蜂環境の調査研究事業」の試験飼育に参加し、北中城村のバナナ農園に巣箱を設置して養蜂を始めた。

アンケート調査では、養蜂作業に参加する前と後を比べると、「毎日の仕事楽しい」や「自然や昆虫への興味があるか」と言う質問に対して前向きな回答があった。

養蜂をソルファで始めると決めた時に、希望者を

募ったが自主的にやりたいという人はなく、職員からやってみませんか?という形でお願いしてそこからスタートした。

やはり初めて養蜂場に行った時は刺されるかも知れないという恐怖があり、動きが硬く、幸先に不安があった。何回か養蜂作業をこなしていくうちに恐怖心はなくなっていった。しかし、順調に取り組んでいるつもりでいたが、自分達の技術不足により担当していた群が全滅してしまった。

令和2年度からの「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」では、新たにセイヨウミツバチ飼育に再度取り組む。この事業では養蜂技術不足を補うために地元養蜂家の池宮崇氏の指導を受けた。また、トウヨウミツバチ協会の障がい者養蜂指導者である春日住夫氏からも講習や技術指導を受けた。そのお

かげもあり、メンバーの養蜂技術も向上し、内検などの基本作業は自分たちで出来るようになった。その結果、無事採蜜することができた。採蜜では養蜂メンバーだけでなく、他のメンバーも大喜びであった。ただ、まだ色々な問題もあり、やることは沢山あるが、楽しむことは忘れずに取り組んでいながら、次年度も工賃対象事業として続けたいと話していた。



ミツバチを中心に生まれる 「つながり」

今日はたくさんのハチミツが採れました

鹿児島県霧島市国分にあるほのぼのでは、B型事業所として農業、洗濯などの軽作業を行っています。施設の庭で、ニホンミツバチ1箱、セイヨウミツバチ4箱の飼育を行っています。ほのぼのの庭には畑もあり

りますが、それほど広い庭ではありません。ですので、庭を歩くと必ずハチが飛んでいるのに出くわします。それほど人とハチとの距離が近い環境で、この日養蜂の作業したのは、馬立さん、内野さんの二人の利用者、それに養蜂指導者の後藤さんの三人。利用者二人とは親子ほど年離れた後藤さん、いつもニコニコの笑顔で二人に話しかけながらの作業。作業自体は後藤さんと馬立さんの二人が中心に進め、内野さんは少し離れてサポートする感じ。この日はニホンミツバチの巣枠を追加し、セイヨウミツバチは内検、蜜の溜まった巣枠を取り出して、遠心分離機で採蜜しました。「思っていたよりたくさんのハチミツが入っていたよ」と後藤さんが言うように、この日は20リットルほどのハチミツが採れました。

観察記録でわかった、ミツバチの不思議

作業が終わって、利用者のお二人に話を聞きました。馬立さんは「普段は洗濯の仕事をしています。久しぶりに養蜂の仕事をして、暑いけれど楽しかった。ニホンミツバチはおとなしくて、セイヨウミツバチにくらべてたくさん飛んでいない。セイヨウミツバチは元気でしたね。たくさん飛んでいて」と話します。養蜂の作業をするようになったことを家族に話すと「なかなか経験できることじゃないから、よかったね」と喜んでくれたといいます。養蜂の仕事をするようになってから、少しだけれど長い時間働けるようになってきた馬立さん。「養蜂は、作業してみても、暑かったり大変なこともあるけれど、楽しい。ハチは全然怖くないです」と話してくれました。

内野さんは「ニホンミツバチのほうがあんまり飛ばないから（やりやすい）」、といいます。今日は少し控えめな作業ぶりだった内野さんですが、実はミツバチに対する興味・関心は誰よりも強いんです。悪天候のとき以外は毎日、ノートにミツバチの観察記録をつけているそうです。「記録を取っていると、晴れていてもあまり飛んでいない日とか、逆に天気が悪くてもすごい飛んでいる日があるので、それが不思議」だといいます。今後は記録に写真をつけられたい



な、と、いろいろな工夫をしているところだそうです。また、以前に採蜜したときの様子を写真に撮って家族に見せたら、家族が驚いて、喜んでくれたといいます。「もともと虫は苦手だったけど、ミツバチに触れているうちに、近づいてもそんなに危なくないということがわかって、慣れてきました」と話してくれました。

養蜂で、体で感じることを経験してほしい

ほのほので養蜂を担当する西さんは「前の所長が『ハチ飼ってハチミツを採りたい』ということで養蜂をはじめました。その時は、ハチミツが食べられるのはいいことだな、っていう単純なことしか思わなくて（笑）」と、養蜂をはじめたきっかけについて話します。知識も経験もないまま、おそろおそろ養蜂に関わるようになった西さんでしたが「ハチの羽音はなんかよくて」、上手にお世話ができたらいいな、という感じで次第に養蜂について学んでいくことになりました。その中で、養蜂によって利用者にいい影響が出てきていることを、次第に感じるようになったといいます。「馬立さんも内野さんも、以前はひきこもりの時期があって、家の中、部屋の中で独りで過ごしていた時間が長くありました。ここに来てやっと人と関わることができていますけれど、学生時代から体験・体感、体で感じることの経験が不足しているんだと思います。そういう状況の中で、外部から後藤さんが『わはは』って笑いながらハチを見たり、ミツバチのかわいい生態を教えてくれたりと、笑いながら関わってくださった。私たち職員だけでは足りない、フォローが難しいところを、後藤さんが自然補ってくれる。養蜂を

中心に、彼ら若者に、いろんな関わりが生まれるようになりました」。仲間と作業できていることが自信につながり、また養蜂を通じて外部の人たちと交流したことが、経験につながっているということです。「内野さんは、以前は気分にはムラがありましたが、養蜂をやるようになってから、すごく安定してきました。週5日朝からずっと出てこられるようになって、ずいぶん体力がついてきました」と西さんは言います。

ミツバチと遊んでいる感覚で

養蜂指導をする後藤さんは、もともとニホンミツバチの養蜂が専門でしたが、近年セイヨウミツバチの養蜂にも活動を広げていて、ほのほのでもニホンミツバチ、セイヨウミツバチの両方の指導をしています。「内野さんの観察日記にはびっくりしました。いいこと書いてありますよね」と嬉しそう。「洗濯の作業をやっている横で、セイヨウミツバチとニホンミツバチを飼っているんです。彼らは毎日、それを見ているんですよ。すると自然に見分けがつかようになってくる」。普段から近くを車で通ることも多いという後藤さん。養蜂指導の日でなくても、「様子はどうか？」とフラッと訪れることもあるそうです。「養蜂家を育てる、というような大げさなことではなく、ミツバチと遊んでいるという感じで、私もそれに付きあっているんです」と話してくれました。

取材が終わった後、内野さんはノートを持って巣箱の方へ。今日も記録をつけています。こうした日々の経験が、いつか彼らにとって大きな財産になってくれることでしょう。





施設紹介 | 企業組合労働センター事業団就労継続支援B型事業所ほのぼの

ワーカーズコープ・センター事業団に所属する国分地域福祉事業所「ほのぼの」は2017年8月に設立し、通所のみの施設として6名（ほぼ毎日通う方4名）が利用する。男女比は男性5名、女性1名、利用者の平均年齢は35歳、平均通所歴は2年、普段の作業は洗濯、農作業や草刈り、箱詰め等の軽作業を担当する。

この施設における養蜂は、平成28年ワーカーズコープ主催の養蜂講座が切っ掛けでセイウミツバチ飼育が始まり、平成29年JRA畜産振興事業の「障がい者が参画する養蜂環境の調査研究事業」の試験飼育に参加する。現在所長の西律子

氏は養蜂指導者としての技術を身につけた。令和2年からは「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」に参加し、地元養蜂家後藤道雄氏の指導を受けてセイウミツバチに加えてニホンミツバチの飼育もはじめた。養蜂に取り組むのは精神障害を持つ2名の20代男性利用者と、知的障害を持ちデイサービスを利用する10代の特別支援学校に通う女子生徒の3名。

話を聞くと3名とも虫は苦手であったと言う。2名の男性利用者は普段洗濯作業をしている。そのすぐそばにニホンミツバチ、セイウミツバチの巣箱があり、はじめは不安に思いながら養蜂作業の様子を見ていたという。所長に「養蜂に参加しな

いか？」と声をかけられたときは「刺されないか不安であった」そうだ。それでも網付き帽子に防護服、厚い手袋をつけて安全面での不安がなくなると楽しく養蜂作業に参加できるようになったと言う。その内、ニホンミツバチはおとなしく、セイウミツバチは元気があるという印象を受ける。また、セイウミツバチは苦手だが、ニホンミツバチは気持ちを通じる気がするので観察日記をつけるようになったという。女子生徒も昆虫は苦手であったが防護服等で刺される不安がなくなると、指導者の説明も親しみがあり、楽しく作業に参加できるようになったという。

訪問調査の当日は、指導者の指示に従い燻煙器で煙をかける作業や、巣枠を持ち上げる作業。採蜜作業では蜜刀で蜜蓋を切り取り、遠心分離機でのハチミツの分離作業を担当した。3人とも積極的に、楽しく作業に参加した。そして「もっとミツバチのことを勉強し、今後も養蜂作業を続けたい」と言う。また、家族や通院している医師から「養蜂できるのはすごいことだと褒められ、美味

しいハチミツをありがとう」と言われたことを嬉しそうに話してくれた。職員の新徳氏によれば、「養蜂作業に参加するようになり、皆さん、普段の作業や生活の場で自信や積極性が出てきた。また、出勤日や作業時間も増えた」と言う。

西所長は、「わたしたちは利用者さんたちと一緒に、日々お日様の暖かさや風を感じながら、庭先でミツバチとも一緒に過ごし共に働いています。不登校から引きこもりとなり精神を患った若者は、小さなミツバチと友達になり蜂を介し出会った人たちとの関りの中で少し自信を取り戻し、次のステップであるA型事業所の見学を決め、ほのぼのを卒業しようとしています。ミツバチと後藤さんとの出会いがあったからこそ素晴らしい成長だと感じています。」とコメントする。今まで社会生活はマイナスのイメージで、2年前までは「人が嫌い」と言っていたが、今は「人が苦手」と言うようになったと、利用者さんの心の変化を話してくれた。こうした変化は他の利用者にも良い影響を与えるという。



農業をする中で、養蜂へも取り組みを広げました。月1回程度の養蜂作業を中心に、日常的な点検、環境整備などを行っています。この日は「8月の養蜂活動」。強い日差しが照りつけ、セミの声があちこちから聞こえてくる中、Mさん、Nさん、Sさん、Zさん、Aさん5人の利用者が、養蜂箱に向かいます。

巣箱は、施設から歩いて5分くらいの森の中にあります。少し距離をとって、ハチがあまり飛んでこない場所にテントが設置されており、そこを作業のベースにします。「今日も暑くなりますから、気をつけて、水分を取って作業しましょう」と注意があつてから、みんなで巣箱へ。母原の養蜂の巣箱は「フローハイブ」という、初心者でも比較的飼育しやすいタイプの巣箱です。フタを開けなくても中の様子やハチミツのたまり具合が確認でき、そのまま巣箱の下部に取り付けられた蛇口から採蜜ができます。蛇口をひねると、すーっと琥珀色のハチミツが流れてきて、作業している全員が、明るい笑顔になりました。採れたハチミツを先程のテントに持ち帰り、さっそく味見。甘い香りがあたりにただよい、みんなの笑顔と笑い声が響きました。

ミツバチを写真に撮って日記づくり

この日の作業に参加した5人の利用者に話を聞きました。「ハチミツ、おいしかった」と言うMさんは、養蜂作業が好きで、特にスズメバチをとらえるワナの交換を手伝うなど積極的に参加しています。ハチの作業が楽しみで、今度いつ作業があるのかいつも気にしているんだそうです。

Nさんも養蜂の作業は「楽しい」と言います。Nさんは巣箱の周りや、巣箱に行くまでの道の草刈りをしてくれているそうです。家族に、ハチミツができたかな、と聞かれたりすることもあるそうで、家族とのコミュニケーションのきっかけになっているようです。

Sさんは「今日は採れたてのハチミツがおいしかった」と笑顔で言ってくれました。養蜂作業中もデジカメでいろいろと写真を撮っていたSさんは、ミツバチの写真日記をつけています。もともと写真が得意

巣箱をやさしく「ポンポン」と叩く

福岡県北九州市小倉にある「社会福祉法人あすなろ学園障害者支援施設母原」。周りを豊かな自然に囲まれた環境で、障がいのある人の生活支援、日中活動支援をしています。日中活動支援の一環として

CASE

社会福祉法人あすなろ学園
障害者支援施設母原

福岡県・北九州市

“ 養蜂を体験することは
「豊かさ」を体験すること ”

だったので「それならミツバチも写真に撮ってみてはどうか」と勧められたのがきっかけではじめたそうです。撮影だけでなく、プリントアウトしてファイルに貼り付け、文も書いています。「巣箱を開けて、ミツバチがいっぱいいたら嬉しい気持ちになる」と話します。

今年から養蜂に参加するようになったお二人、ZさんとAさん。Zさんは「今日したような、ミツバチの作業(採蜜)が楽しい」と言います。またAさんは、まだ体験したことのない瓶詰め作業を楽しみにしていると話してくれました。「ハチのことをみんなに話すと『がんばってね』とか『ハチミツ食べたいな』と言ってくれます。楽しい、がんばろう」と、やる気を見せてくれました。

養蜂を通じて、 みんなの「引き出し」が増えた

「皆さんから『養蜂』という言葉が出てくるのを聞くだけで感慨深いです」と話すのは、母原の職員で養蜂担当の藤本さん。「いつもみなさん、なかなか自分の思いを伝えることに苦労していらっしゃる部分があると思うんですが、養蜂の作業を通じて、みなさんがそれぞれ自分なりに考えたことや思ったことを伝えようとしているのがわかるんですね。つくったハチミツを、施設の仲間たちに味わってほしいという思いや、作業に対する責任感が生まれている気がしています。それは日々の生活でなかなか味わうことのできないことで、養蜂によってみなさんすごく刺激されていると思います」。養蜂を通じて、いろんな「引き出し」が、利用者のみなさんに生まれていると感じてい

るそうです。「表情にしても、発言にしても『ああ、ここまで言えるんだ』と感ずることが多く、それは養蜂によってもたらされたものなのかな、と思っています」。

養蜂を指導する舩本哲也さんは「もともと私は『園芸療法』という取り組みを勧めていまして、その中で養蜂の福祉的な可能性について取り組みたいという思いがありました。そこで母原さんに、養蜂をやってみませんか、とお声がけしたのです」ときっかけを話します。

母原の施設長である吉田貴志さんは「養蜂をはじめめるかどうかについては、当初少し悩みました」と話します。「施設職員は限られますので、人的な部分で負荷がかかるのではないかとというのが懸念でした」。しかし「私たちは社会になんらかの形で貢献しなければならないという思いを、強く持っています。養蜂はその可能性があるから、まずはやってみよう」と、3年前に養蜂をはじめめることを決めました。「自分たちのやっていることは、社会に対してこういう意味があるんだ、ということ、利用者も職員もしっかり実感することが大切だと思っています。養蜂は、できたハチミツの販売などで、地域に私たちの活動を知ってもらうことができますし、また指導して下さる舩本さんを通じて社会とさまざまなつながりができたことは大きな収穫でした」。舩本さんが取り組む、北九州市の保育園や幼稚園、小学校のグラウンドを芝生化する取り組みに使用する芝生を育てる仕事なども増え、地域や社会の中での存在感も増してきました。

養蜂には、作業に参加する障がいのある人たちのモチベーションを上げるだけでなく、施設や職員の地域や社会におけるプレゼンテーションも向上させることができる、そんな可能性を感じることができます。





施設紹介 | 社会福祉法人あすなろ学園 障害者支援施設母原

「あすなろ学園障害者支援施設母原」は1957年に15名の知的障がい児童を預かる私塾を発端とし、1967年に定員30名の知的障害児施設あすなろ学園、1976年に定員57名の知的障害者更生施設「母原更生センター」を設立した。これを障害者自立支援法の体系の下、2012年に「障害者支援施設母原」と名称を変更している。この施設における養蜂は上述の「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」における試験飼育の一例である。ここでは入所施設利用者50名の内10名が農作業を担当している。養蜂作

業には農作業担当者の中から希望者を募り、地元養蜂家の指導を受けて、各人の無理のない作業に20代から60代の男性3名、女性2名が参加している。自然豊かな環境を活かしニホンミツバチ3群を飼育し、さらに待受け巣箱も4つ設置している。利用者の担当作業としては、異変がないかの日々の見守りや、スズメバチ捕獲のためのトラップ作りとその設置。蜂蜜収穫、その蜂蜜の瓶詰め・ラベル張りも経験し、収穫した蜜蝋の精製やその加工作業も行っている。

2020年9月20日付「西日本新聞」は、「養蜂で探る

「農福連携」蜂蜜収穫成功、商品化目指す 障害者施設 障害者支援に取り組む社会福祉法人「あすなろ学園」（北九州市小倉南区）と題する記事を載せた。同区新道寺で運営する「障害者支援施設母原」でニホンミツバチを試験的に飼育する取り組みを進めている。障害者が農業に携わる「農福連携」の可能性を探る取り組みであり、15日には利用者や職員が蜂蜜採取に初めて成功した。同法人は同施設母原で来年も事業を続け、将来的に商品化を目指す方針であり、吉田貴志施設長は「蜂蜜の瓶詰めやステッカー貼りなど、障害者それぞれの能力に合わせて工程を分担することで、就労につなげられる可能性がある」と述べている。

作業に参加している女性利用者の一人は写真撮影が趣味であり、毎回の作業の様子を写真に撮り文章を添えた観察日記をつけ、養蜂担当以外の職員や利

用者にこれを見せて養蜂の様子を伝えている。施設職員の話からも蜜蜂作業に参加することで、職員と利用者、利用者同士のコミュニケーションが増えている。また、外部から指導者が来て一緒に作業することは「入所利用者にとって生活の刺激となるため、養蜂作業を楽しみにしている利用者が多い」と職員は語っていた。

この施設では利用者の農作業で養蜂と同時に、季節の野菜やビニールハウスで豆類の栽培等を行っていた。この園芸と養蜂の組み合わせは利用者を自然と向き合うことを可能にし、作業者の反応も良好ということであった。養蜂作業の魅力の1つは蜂蜜を試食することであり「蜜蜂と協力しながら美味しい蜂蜜」を作ることが利用者の自立した生活への自信の一端につながるのではないかと考えるのである。

自然栽培の農場と、 セイヨウミツバチの巣箱

さなぎが孵化するところに立ち会いたい

静岡県浜松市の特定非営利活動法人スマイルベリーでは、自然栽培での農業を行っています。事務所の周囲には、無農薬・無肥料が特徴の自然栽培の農場が広がります。さまざまな種類の植物が勢いよく茂る中をかき分けた敷地の奥の方に、5箱のセイヨウミツ

バチの巣箱があります。今日は定期的な内検の作業。スマイルベリーの利用者3人、養蜂指導者の塩見さん夫妻、スマイルベリーの養蜂担当である豊田さんが作業をしています。見ていると特徴的なのは、一人ひとりが自立して作業をしていること。誰の指示も受けず「一人一箱」を担当しながら自分のペースで作業を進めています。内検もそれぞれがやります。わからないことがあれば指導者の塩見さんや、豊田さんに聞く、という具合。決して急いだ感じはありませんが、てきぱきと作業をし、気づけば5箱分の作業が終わっていました。

この日の作業に参加していた利用者は、Mさん、Fさん、Iさんの3人。作業を終えたみなさんに、養蜂について聞きました。Mさんは養蜂作業について「緊張します」と言います。「やっぱり気を使います。これまでに4回刺されたこともありますし」。怖くならないのですか？ と聞くと、「いや、怖いということはないですね」と頼もしい返事。やっぱり一番楽しいのは「ハチミツを食べられることですね」と笑います。「けっこういっぱいなめちゃいますね(笑)」。「巣板の取り出しをもっと素早くやりたい。今は時間がかかっちゃうので、ハチが気分を悪くするかもしれない」と今後について話してくれました。

Fさんは、女王バチを見つけることができると「やったー」という気持ちになるそうです。「養蜂をはじめて頃と比べると作業にはずいぶん慣れました」。

岩上さんは、養蜂の作業については「楽しい」と言いますが、「みんなハチに2回以上は刺されているけど、自分はまだ1回しか刺されていないので、それ以上は刺されたくない」とのこと。「さなぎから孵化する、生まれてくる瞬間に立ち会えたらいいな」という気持ちで内検をしているそうです。

教える時に、障がいのあるなしは気にならない

スマイルベリーで養蜂を指導しているのは、浜松市内で養蜂業を営む「養紡屋」の塩見亮太さんと塩見未沙さん。塩見亮太さんは「最初、どこまで教えればいいのかわからなかったけど、コミュニケーションの仕方が、こちらも慣れてきたし、みんなも僕に慣れてきた感じがして、今はとてもうまくいっています」と言います。スマイ



ルベリーの養蜂作業は、みんなで一つひとつの巣箱を内検するのではなく、利用者一人ひとりがそれぞれ別々の巣箱を内検するやり方をしているのが印象的でしたが、塩見さんが養蜂指導に入った当初からその方法でやっていたそうです。「最初は少し詳しく指導しましたが、割と早い段階でみんな作業をおぼえてくれましたね」と塩見未沙さん。「私たちが指導に入らないときも毎週のように作業してくれているので、おぼえるのはやかったんでしょうね」。

毎週の養蜂作業の後には、それぞれの利用者が記録をつけて報告することになっているそうです。塩見さんはそれを見て状況を把握し、時にはアドバイスをします。「誰でも一日を振り返ることって大事じゃないですか。作業についても、記録を通じて『振り返る』ことで身につく、おぼえていくっていいことだと思います」。指導するのに障がいがあるかないかは、あまり気にしていないといいます。「先入観とか第一印象で『この人こういう人だな』っていうのがあったとしても、何回もあっているうちにそれって変わっていきますよね。障がいがあってもなくてもそれは同じで、なので今後は彼らに障がいがあるかどうかなんて、考えてなくて、ただここに教えに来ているだけという感覚です。そういう感覚になった、ということがむしろ勉強になったことかもしれませんね」。

自然の中で、ミツバチの果たす役割は重要

スマイルベリープロジェクトリーダーの豊田由美さんは「もともと自然栽培パーティや銀座ミツバチプロジェクトの養蜂の取り組みはよく存じ上げていて、うちでもそういう取り組みができればいいな、とは思っていました。た

だ、施設で養蜂をやるというだけでなく、養蜂の技術を身につけていかないと、継続できない事業になってしまうので、プロの方に指導していただきながら、自立して事業を継続できるような技術をこちらでも身につける形にしていきたいと思っていました。ですので、もともと知り合いだった塩見さんにお声がけしたというのがきっかけです」と、きっかけについて話してくれました。「自然栽培などについて知るうちに、ミツバチの存在ってすごく大事だと感じるようになり、うちの事業に何とか取り入れたいと思ったんです」。

そうした思いで取り組んだ養蜂事業ですが、利用者にとってもメリットがあるのではと期待しています。「富士の施設の方で、ニホンミツバチの飼育をした経験もあるのですが、そのとき、野菜をつくることは苦手な人でも、ミツバチの観察はできて、毎日なにかを報告してくれる、ということがありました。畑の作業って結構しんどくて、なかなか誰もが毎日畑に立てるわけじゃないんです。そうした時に養蜂の仕事も用意できれば、という思いもあります」。

スマイルベリーで養蜂事業を担当する職員・豊田春奈さんは「養蜂作業を通じて、責任感がついてきたのかな、と思います。たとえばミツバチに触れてから、作業がない日も毎日気になって様子を見に行くようになったりとか。『今日作業はやらなくていいの』とか『どうなったかな』とか」。生き物が好きじゃないように思えた人でも、ミツバチのことを気にするようになったことが発見だったといいます。また、参加している人のモチベーションの変化も感じているそうで、たとえば今日養蜂作業に参加していた利用者のひとり、Iさんも、以前はなにかにつけて体調の不良を訴えていたそうですが、最近ではそうしたことも減ったということです。





施設紹介 | 特定非営利活動法人スマイルベリー

特定非営利活動法人スマイルベリーは2011年4月に設立し、就労継続支援A型(定員30名)、就労継続支援B型(定員20名)の通所の施設として福祉サービスを行う。現在39名の利用者さんがほぼ毎日通い、清掃作業、農作業、草刈り作業、袋詰めなど軽作業に取り組んでいます。

この施設における養蜂は、平成29年JRA畜産振興事業で実施した「障がい者が参画する養蜂環境の調査研究事業」の試験飼育に参加し、ニホンミツバチ飼育を始めた。

令和2年度からの「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」では、新たにセイヨウミツバチ飼育に取り組む。養蜂作業は、就労継続支援B型のメンバーから希望者をつのり、手を挙げた20代から50代の男性3名が参加している。

養蜂に取り組む体制も強化し、養蜂担当スタッフ豊田春奈さんが対応している。

令和2年度は養蜂指導の塩見亮太さんに基礎的な流れを教わり、燻煙器の使い方、つけ方、女王バチの見つけ方など3群で技術と流れを習得した。採蜜は行

わず、群の管理に努めた。

令和3年度は2群増やし、5群スタートで養蜂を開始した。春先の分蜂に気をつけていたが1群分蜂してしまった。その後、他の群から分けて6〜7群で飼育をした。

利用者もメンバーが1名入れ替わったが、3名で基本的な作業を行い、内検についてはみんなができるようになり、採蜜も行った。採蜜については3回行い40kgを収穫した。

販売については地元の商店にイベント出店し、「Oh!my honey」というブランド名を作り蜂蜜を使った総菜やお菓子を作り販売した。

また、「みつばちと畑のがっこう」という自然栽培を学ぶ学校を立ち上げ、一般参加者を募り毎月1回、自然栽培とみつばちを学べる機会を提供している。この

中で、8月にBee Partyというイベントを行い、養蜂に係るメンバーが養蜂の作業について参加者に説明する機会もあった。商品を販売し、イベントで人に説明することでより養蜂作業への取り組みが積極的になった。

今後はお店を構えて販売が充実するような取り組みを行っていく予定で、養蜂家の塩見亮太氏とも引き続き連携していく。





CASE

名身連
第一ワークス・第一デイサービス

愛知県・名古屋市

“ 毎月1日は熱田神宮の
はちみつをどうぞ! ”

神社の境内で、はちみつを販売

「いらっしゃいませ!」、「あつたハニーはいかがですか?」。

大きな木々が両脇に生い茂る、鬱蒼とした道。小雨が降っていますが、多くの人が行き交うその道端から、ひととき大きな声が聞こえてきます。

ここは、愛知県名古屋市にある熱田神宮。三種の神器の一つである「草薙(くさなぎ)の剣」を御神体としてお祀りする由緒正しい神社です。その熱田神宮の境内では、毎月一日に「あつた朔日市(ついたちいち)」が開かれています。熱田神宮には、前の月を無事に過ごせたことへの感謝と、新しい月の無病息災などをお祈りする「朔日参り」の風習があり、毎月一日の朝には、多くの人がお参りに訪れます。その参拝客に向けて、地元の商店などが出店を出しています。

市内で古くから障害者福祉と障害者の就労に取り組む社会福祉法人「名身連(名古屋市身体障害者福祉連合会)」が、施設の屋上でとれたはちみつを「あつたハニー」として朔日市で販売しています。

都市養蜂を手がけてきた名古屋学院大学の水野晶夫教授の協力で養蜂をはじめたのが2019年。水野教授のゼミに所属する学生たちの協力も受けながら、セイヨウミツバチの飼育をしました。とれたはちみつを朔日市で売ってはどうか、と提案してくれたのも水野教授。こうして、施設職員だけでなく利用者も一緒になって、朔日市での販売をしています。

食べ物には「ひき」がある

今日あつたハニーを売っている利用者さんは、杉山さんと野村さんの2人。ふたりともいつもは軽作業などをしています。杉山さんは「名身連ではちみつをつくりはじめた時に、自然の中ではちみつをつくるんじゃないって、建物でつくってどういうことなのかな、と興味を持ったんです。それで去年とれたはちみつを食べてみたら、すごく美味しかった。感動して、売ってみたいと思いました。はじめて販売をはじめたばかりの頃は、知らない人に売るといって私もしんどかったんですけど、最近買われ

る人って、名身連でつくっているはちみつだっていうことを知っている人も多いので、売りやすくなりました。普段は軽作業をしているので、こうして販売の仕事をするのは気分が変わって楽しいですね」と話してくれました。

野村さんは、あまり多くはしゃべりませんが、杉山さんや職員の方と一緒に、道行く人にはちみつを熱心に勧めています。買ってくれた人には、満面の笑顔でごあいさつ。その魅力的な笑顔に惹かれた多くの人の足を止めています。

朔日市では、はちみつの他に、名身連でつくっている手芸品なども売っています。はちみつを売ることで、それらの手芸品などにも興味を持ってもらうことができ、結果的に売上につながっているそうです。「やはり食べものには『ひき』がありますね。試食などで声もかけやすいです」と職員の一人が話してくれました。

養蜂で今まで知らなかった一面が見られる

名身連で養蜂を担当する職員・坪井美佳さん。養蜂をはじめた当時は「養蜂をはじめることについては、施設内で不安の声もあがりましたが、養蜂をすることのメリットや楽しさを伝えはちみつを味見してもらうことでなんとか(笑)」と当時を振り返ります。

「普段の仕事は、もくもく行う仕事が多いので、仕事中に笑顔を見ることは少なかったんですけど、お客さんの前に出ると自然と笑顔になったり、話しかけるようになります。たとえば、杉山さんは販売の時に巣箱の話をしています。実は私、教えたことないんですよ(笑)。教えなくても、見て学んでいるっていうのは素晴らしいことだな、と感じています」。

名身連で養蜂を担当している利用者・瀬口さん。坪井さんと一緒に養蜂を行っています。「今まで瀬口さんはなかなか自分から何かをするということがなかったんですけど、養蜂をやるようになって笑顔が見えたり、また自分から話しかけてくれるようになったりと、今まで見せることのなかった顔を見せてくれるようになったんです」と坪井さん。

養蜂は、工賃向上の手段としても有効ですが、利用者さんに今まで見たことのない一面に気づかせてくれる、利用者さんの新しい可能性を見出すことができる取り組みでもあるようです。



施設紹介

社会福祉法人 名古屋市身体障害者福祉連合会(略称:名身連) 名身連第一ワークス・第一デイサービス

名身連は、1949年12月に設立し名古屋市内において、最も歴史のある身体障害を中心とした当事者団体で、最大の会員数を持っています。身体障害といっても、肢体障害、聴覚言語障害(ろう、難聴、喉頭摘出)、視覚(全盲、弱視)、内部(オストメイト、オストミー)等、さまざまな障害があります。また様々な障害福祉事業を行っており施設利用者には身体障害だけでなく知的障害や精神障害の方も通っています。

養蜂に取り組む「名身連第一ワークス・第一デイサービス」は、就労継続支援B型事業の通所の施設と

して福祉サービスを行い、現在30名が利用登録し毎日平均22名が通い、清掃作業、縫製作業、箱詰め等の軽作業に取り組んでいます。

この施設における養蜂は、令和2年度からの「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」の試験飼育に参加し、坪井さんを中心に、まず2名の職員が養蜂技術を習得し、徐々に利用者さんの参加を促しています。現在、養蜂作業に参加するのは軽度の精神障害を持つ40代の男性1名ですが、蜂蜜の分離作業や、瓶詰、ラベル貼り、熱田神宮朔日市での販売には、6

名の利用者さんも参加しています。

養蜂作業に参加する利用者さんは、養蜂技術を習得するにつれてミツバチへの関心が増えるだけでなく、その他の仕事にも自信が持てるようになりコミュニケーションも増えてきたといいます。人との接触が苦手な為、熱田神宮朔日市での販売に立つことは当初消極的でしたが、「今回は、販売にも参加しようかな」と自分から言い出すまでになりました。

養蜂作業をしていただいていた1名の利用者の夏の作業ですが、屋上であること、名古屋の夏は暑いこと、養蜂作業がしたいので暑くても無理をすることもあり、利用者の体調を考慮して参加は控え分離作業、瓶詰やラベル貼りを主に行っていました。涼くなってからは養蜂作業を再開していただいています。内検作業もご自分から現状や疑問点を伝えてくだ

さるのでお任せして行っています。昨年より採蜜量も大幅に増えましたが、コロナ感染拡大による緊急事態宣言等が発令され販売活動ができない時期もあり、在庫がある状況ですが完売を目指し販売先拡大を検討し工賃向上に繋げていきたいと思っています。



開墾パワー！ 養蜂で山の恵みを受け取る



粘着シートにいっぱいのオオスズメバチ！

茨城県、筑波山麓の豊かな自然に囲まれている「社会福祉法人筑峯学園 障害者支援センター未来」では、2年前から養蜂にチャレンジし、今年はセイヨウミツバチの飼育をはじめました。養蜂場は林の中にありますが、オオスズメバチがたくさん飛来する場所でもあり、巣箱の上に置かれた粘着シートには、いっぱいのオオスズメバチが集まっていました。作業中にもオオスズメバチが飛んでくるのですが、作業している人たちはそんなことはものともせず、みんなで協力しあいながら作業を進めている姿が印象的でした。

この日の作業に参加した4人の利用者さん（広瀬さん、高田さん、久松さん、鏑さん）に話を聞きました。養蜂の楽しいところはどこですか、と聞くと、「巣枠を持って、女王がいないかなど観察するのが楽しい」、「（燻煙器で）煙をかけたりするのが楽しい」などと答えてくれました。反対に養蜂の嫌なところ、怖いところはなんですか、と聞くと「スズメバチが怖い」との答えが返ってきました。自分で採ったハチミツを食べたときのことを聞くと、みなさんハキハキと「おいしかった」と答えてくれました。

筑峯学園で養蜂作業を担当している職員・井上さんは「養蜂をやるようになって、自然や虫に興味を持つようになったように思います」と言います。普段は開墾や農業をやっているの、養蜂は気分転換やモチベーションアップになっているそうです。井上さんと一緒に養蜂作業を担当している宮田さんは「私は今回、みんなと一緒に作業するのはほぼはじめて、という状況なのですが、『みんなこんなにできるんだ』という驚きがありました」と話してくれました。

製品化することで、地域の人に発信したい

センター長の松島寿樹さんは「以前はニホンミツバチの飼育をしていましたが、製品化を視野に入ると採れる蜜の量や収量の安定性から、セイヨウミツバチの方がいいんじゃないかということで、セイヨウミツバチの養蜂をはじめました」と、養蜂の経緯について話してくださいました。セイヨウミツバチの飼育をはじめたことで多くのハチミツが採れ、それを製品化して「筑峯はちみつ」として売り出すことができたそうです。「でも、利用者さんの家族など関係者だけであつという間に売り切れてしまって（笑）。次は負担にならない程度にセイヨウミツバチの数を増やして、採蜜できる量を増やしていきたいと考えています」と松島さん。「これまでニホンミツバチを飼育してきました。今回セイヨウミツバチの養蜂に2年取り組んできて、今年やっと製品化できるだけのハチミツが採れて、どれくらい作業が必要なのかイメージができてきました。今後は負担にならない程度に養蜂の規模を拡大して、もっと多くのハチミツを地域の人にも届けたいです」と言います。

自然の中から、 なるべく多くの仕事をつくり出す

養蜂の持つ効果についてはこう話します。「障がいを持っている人って、育ちの中でいろいろな傷を負ってきていることが多いんです。それでも、私たちと同じように承認欲求があり、自己顕示欲がある。養蜂作業に限ったことではないのですが、責任ある仕事を任される、他者から頼りにされることは、生きがいとかやりがいにつながっていると思います」。また、地域の方から「すごいね」、「よくやっているね」、とほめられ評価されることもモチベーションにつながると松島さんは言います「今はコロナで少し動きが鈍っていますが、落ち着いたらハチミツの販売なども利用者さんにやってもらうことも考えています。それがさらにやる気につながることを期待しています」。

「養蜂に限らず農業もそうですが、仕事には向き不向きがあって、農業に向かない人、養蜂に向かない人、またその逆は常にあります。さいわい私たちの施設の周辺は豊かな自然に恵まれています。自然からさまざまな仕事を生み出すことができます。『百姓』という言葉が示す通り、自然の中からたくさんの仕事をつくりだすことで、誰でもなにかしらできることがある環境を整えたいと思っています。養蜂もその一つとして位置づけられれば、と思っています」。



施設紹介 | 社会福祉法人筑峯学園 障害者支援センター未来

社会福祉法人筑峯学園は、茨城県つくば市 筑波山の山すその温暖な自然に恵まれた環境のもと、知的障害児・者の支援をしている。現在、知的障害児入所施設（定員40名）、障害者支援センター未来（通所作業所）、ほっとハウス（共同生活援助グループホーム）、相談支援事業所、児童発達支援事業所を運営し、大正12年から続く歴史ある施設だ。

そこで実際にどのように養蜂を手掛けているのか、「障害者支援センター未来」での現地調査を実施した。この事業所は2006年10月に設立し、通所施設として、就労

継続支援B型事業（定員15名）、生活介護事業（定員45名）の各サービスを提供する。利用者は筑峯学園のグループホームと各家庭より通ってくる。普段の作業は、農作業（稲作、畑）、果樹栽培、果実加工、竹炭作り、木工芸、原木椎茸栽培などを担当する。

この施設における養蜂は、平成29年JRA畜産振興事業で実施した「障がい者が参画する養蜂環境の調査研究事業」の試験飼育に参加したことが切っ掛けとなり、職員の井上大志氏が養蜂技術を身につけ養蜂指導者となり継続してきた。

令和2年より「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」にセイヨウミツバチ飼育で参加し、現在西洋ミツバチと日本ミツバチの飼育を行なっている。日本ミツバチは毎年分蜂群が来るので、平均して3群程度は捕獲する事ができ、現時点で2群のニホンミツバチを飼育している。セイヨウミツバチの飼育は3年前に飼育指導の長谷川清氏より、2群頂いたのをきっかけに挑戦を始め、今回の調査研究事業の試験飼育から本格的に採蜜に向けた飼育を始めた。セイヨウミツバチの管理の中で特に大変だったのがスズメバチとの闘いで、山裾という立地上スズメバチが営巣する事が多く、特にオオスズメバチが多いので、多くの群れがオオスズメバチの被害で壊滅してしまった。侵入防止に捕殺器やネットを設置したが、集団で襲いに来るとトラップだけでは対応できず、巣箱そのものに近付けないようにする必要があると考えている。また、

根本的な問題として、職員数の少なさや体制上の問題から養蜂作業の時間が取りづらく、スズメバチの襲撃が激化しつつある事が分かっているにも対応に時間を割く事ができなかった。そんな中でも、養蜂スタッフ以外の職員にも蜜源植物の栽培に協力を得られたことは良かった。トウヨウミツバチ協会の指導を受けて連携しながら、何とか採蜜までこぎつける事ができ、念願の商品化が達成できた。蜜源植物の栽培は、職員の理解と協力を得る為に、蜜源となる植物の一覧や年間スケジュール等を作成して提示した事で、職員も各々が考えて取り組んでくれるようになり、今後は樹木系の蜜源植物の栽培も進めて行きたいという。

現地調査報告

株式会社 Seed 多機能型事業所 Seed

多機能型事業所Seedは2016年5月設立し、就労支援A型事業、就労支援B型事業の通所の施設として福祉サービスを行い約60名が利用している。事業所は札幌市内の都心に位置しているが、事業所では様々な障がいを持った利用者さんが安心して働ける環境の中農業(西区小沢別農園・当別町)農産物の加工・管理、コンピューターを使った経理、webサイト管理など様々な仕事に取り組み、一人一人が自分にあった仕事を見つけて心身ともに健康を回復しながら社会復帰する準備をしている。

この施設における養蜂は、平成29年JRA畜産振興事業で実施した「障がい者が参画する養蜂環境の調査研究事業」の試験飼育に参加しセイヨウミツバチの試験飼育を当別町の農園で始めた。

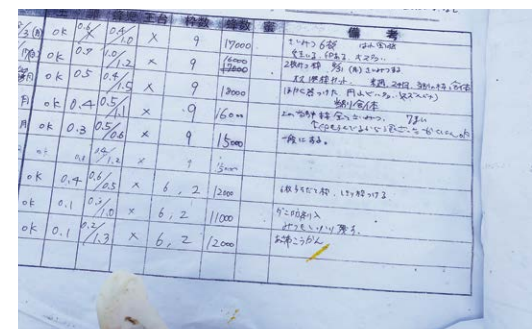
令和2年度からの「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」では、地元養蜂業者の指導を受けて市内の屋上にセイヨウミツバチ飼育に取り組む。養蜂作業は、就労継続支援A型のメンバーから希望者をつのり、手を挙げた20代から30代の男性3名、女性3名の合計6名の障がい者が参加している。令和3年度は規模を拡大し市内3ヵ所の屋上を借り合計16群のミツバチの飼育をしている。

現地調査では円山養蜂場と桑園養蜂所の2箇所を視察する。この日は養蜂指導者と2名の利用者の作業であったが手際の良さに目を見張った。養蜂場に着くとまずは防護服を身に付けると、お互いが相手の服装をチェックする。次に指導者と作業の流れを確認すると、2チームとなり早速作業がはじまる。燵煙器に火をつけ、巣門に煙をかける。巣箱の蓋をあけ煙をかけた後、一枚一枚巣枠を持ちあげて内検していく。女王蜂、卵、幼虫、蛹、など見分けて、巣枠の状態

を確認できるという。内検が終わるとその群れの様子を記録し、指導者に報告する。また、女王蜂が見つからない時や、蜂数が少なく異常を感じる時は指導者に声をかけ指示を仰ぐ。また仕事の流れで区切りが良い時になると指導者に声をかけて休憩に入り、決められた休憩時間が終わると作業にもどる。内検終了時には指導者と各群れの記録の確認をして清掃を始める。2人に養蜂作業は何時から始めたのか聞くと5月からだそうだ。たった3カ月でこれほど上達するのかと驚きながら、事業所の養蜂への取組方についてインタビューした。SeedではA型事業として養蜂に取り組んでいる。その為、無理はさせないが能力が発揮できるような体制を組んでいるという。今回作業に参加した2名は、室内の作業より、太陽の下で働きたいと希望し普段は自然栽培の農園で働いている。シフトの関係が許せば週2日の養蜂作業に参加するという。はじめ養蜂に誘われたときは「ミツバチに刺されるか不安であった。」が、防護服を着て手袋をすると刺されないことが分かり安心して作業できたという。「作業回数が増えたと段々可愛くなり、どの花に飛んで行くのか興味を持つようになった。」という。そして公園や道端の花も踏まないように気をつけるようになったと言う。養蜂はもっと勉強して上手になりたいと答えてくれた。

このようにメンバーの意識も高く、養蜂技術も向上したことから今年度は採蜜回数11回、377kgのハチミツを収穫した。収穫したハチミツは瓶詰めして販売し、はちみつパンなどの加工品も製造した。

株式会社Seedでは利用者の養蜂技術の向上や、販路拡大にも成功したので次年度は養蜂場の数を増やし事業規模を拡大していく計画だそうだ。



現地調査報告

埼玉福興株式会社 特定非営利活動法人 Group Farm

1993年、一つの知的障がい者の生活寮からスタート、1996年5月株式会社埼玉福興を設立し、2003年設立の特定非営利活動法人 Group Farmや他のグループ内法人と連携して、障がい者と共に生活をし、共に働き、共に生きる。そして障がいがあっても立派に社会の一員として活躍できるよう挑戦を続け、単なる障がい者の福祉増進・その場だけの支援に終始することなく、福祉・人間の本質である、喜びに満ちた幸せな生涯を送ることを目的と考え、障がい者の一生の暮らしに考慮した、トータル福祉を常に考え創造を続けている。障害者生活寮、グループホーム、就労継続支援B型事業所・多機能事業所を運営し、入所30名、通所3名、合計33名が利用している。普段の仕事としては葉物野菜、野菜苗栽培、オリーブ農園の管理に取り組んでいる。

この事業所における養蜂は、平成29年JRA畜産振興事業で実施した「障がい者が参画する養蜂環境の調査研究事業」の試験飼育に参加しセイヨウミツバチの試験飼育を始めた。

令和2年度からの「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」では規模を拡大しながらセイヨウミツバチ飼育に取り組む。養蜂作業は軽度の精神障害

を持つ利用者が責任者も兼ねて取り組んできた。

この2年間のミツバチの飼育の体験は、T君にとって特に以下の3点において、非常に貴重な体験となった。

まず第一に精神的には、毎日ミツバチを眺めることが日課になり、ミツバチが巣門でとぎれなく出入りする様子がとても心地よく、気持ちを落ち着けることができた。

第二に、肉体的には、養蜂作業はときに重労働も必要であったため、体を十分に動かすことができ、体力の向上に役だった。

第三に知的な面において、ミツバチの生態はもちろん、植物の名前を覚えるようにするなど、自然全体に関する知識を積極的に収集するようになった。

養蜂を通して、そうじて、自分の内側だけでなく、自分の外側にも大きな関心を持ち、以前よりも、よりよい社会生活がおくれるようになった。

ミツバチを通しての周囲のひととのコミュニケーションも増え、新たな友人をつくることもできるようになった。

そうして、新たな場所へと旅立つことができるまでになったことは、ミツバチ飼育の大きな恩恵であった。



現地調査報告 | 公益財団法人 柿葉会 神奈川診療所 精神科デイケア

神奈川診療所では精神科デイケアを併設して、朝から夕方までの時間を仲間たちと過ごすことで、自分自身の目標を見つけ、社会の中で過ごしていく工夫などをみんなで一緒に考えて、練習している。

デイケア利用者の生きがいの創造やQOLの向上を目的にニホンミツバチ飼育の導入を検討した。幸い診療所に隣接する薬局長宅で飼育経験があった。

令和2年度からの「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」では、ニホンミツバチ飼育に取り組むためトウヨウミツバチ協会より飼育指導を受けた。養蜂作業や日々の管理はデイケア職員が担当し、利用者はミツバチの見守り観察や採蜜体験に参加した。また、利用者のミツバチへの理解を深めるために、6月3日には、トウヨウミツバチ協会から講師を招いてミツバチ講習会を開催した。スライド資料を使いミツバチの生態や役割などを学ぶ。

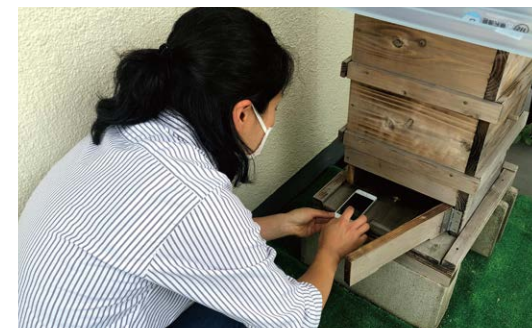
「働き蜂は皆メスで、人もミツバチも働き者は女性だ。」という説明に特に女性利用者は興味を持った。また、10月28日には、初めての採蜜を実施した。

職員からは、「診療所では、養蜂を始める前は、最初

はハチミツなどの食への関心の高さや、刺されたら痛いというイメージでしたが、養蜂を通じて、積極的に観察や作業をしてくれる方が数名出てきました。ハチミツの希少さや、少しずつ物事を積み重ねていくことの大事さにも目が向くようになったなと思います。帰路でも、虫が飛んでいると診療所の蜂かなと気になったと、視野の広さも出てきました。」と楽しそうに話す。

採蜜後は、巣板を子供に見せたいからもらえないかと言ったり、その後の巣板を蜜蝋にする作業や、パウンドケーキを作る作業にも自ら興味を持って手伝いに来てくれたりする姿が見られた。また、B群の採蜜はデイケア時間外であったが、率先して居残りを申し出てくれたりする方もいた。

療育効果について、「一部のメンバーさんは積極性が出てきたり癒されたりしているなと思います。何より、病気のことではない、共通の話題があることが良いようです。これはメダカの飼育でも感じております。」と言うコメントを得た。今後も精神科デイケアとしてニホンミツバチ飼育を続けていきたいと言う。



現地調査報告 | 特定非営利活動法人 EPO

特定非営利活動法人EPOは2009年8月に設立し、就労継続支援B型事業、就労移行・自立訓練（生活訓練）の通所の施設として福祉サービスを行う。現在18名の利用者のうち14名がほぼ毎日通い、ファームの農作業を中心に整備やワークショップのスタッフ業務、具体的には自主商品の製作や動物の飼育（馬・羊）、農作業、飲食店厨房補助・羊毛加工・ワークショップなど幅広い作業の中から自分にあった職種の訓練が可能である。

またこの施設では、発達の遅れが気になる子どもたちの社会生活をサポートする療育施設として、小学校入学前のお子さんの発達支援と小学校1年～18歳までのお子さんへの放課後等デイサービスを行う児童福祉法に基づいた福祉サービスを行っている。特に富士山麓の自然豊かな環境を大いに満喫しながら、個別の課題に沿った乗馬療法・感覚統合による療育が特徴だ。乗馬療法では馬の世話や触れ合うことから始まり、およそ人と同じ体温を持つ動物は触れ合うことで安らぎを与え、怖さを感じる児童はインストラクターと一緒に乗ることから始める。慣れてくると引馬

で森の中のコースにも出る。今回アニマルセラピーの視点でミツバチ飼育にも関心を持ち養蜂を始めた。

この施設における養蜂は、令和2年度からの「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」で、セイヨウミツバチ飼育に取り組むことが切っ掛けとなった。養蜂作業は、スタッフや地域の支援メンバーと軽度の精神障害を持つ就労移行支援の利用者が担当している。

地元静岡県内の養蜂家の指導を受けて、まずは施設職員と支援メンバーが養蜂技術を習得し、安全に配慮しながら2名の利用者が参加する。また、この施設では地元の自然栽培生産者と連携し農業体験が出来る「土のうえ空のした」農園を運営し、障がいの有る無しに関わらず笑顔で自然や農業に触れあっている。ミツバチ体験もその1つとなり採蜜したハチミツを見学の後に皆で試食し参加者に喜ばれたという。養蜂に参加する利用者は定期的に養蜂作業前後で自律神経測定を実施し、養蜂作業とストレス及びストレス緩和効果を「ホースセラピー」の視点で検証している。



現地調査報告 | 特定非営利活動法人森の学校（福岡県）

特定非営利活動法人森の学校は2005年7月に設立し、就労継続支援A型、就労継続支援B型の通所の施設として、山すその自然豊かな環境の中で福祉サービスを行う。現在32名の利用があり23名がほぼ毎日通う。主な仕事は、清掃作業、農作業、草刈り作業、木質バイオマスペレット作業、木工作业等に取り組んでいる。

この施設における養蜂は、地元ニホンミツバチシ飼育者の安永則之氏が施設内に巣箱を設置して分蜂群を捕獲したことが切っ掛けだ。令和2年度からの「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」で、安永氏が指導者となりニホンミツバチ飼育を始めた。養蜂作業は、就労継続支援A型のメンバーから希望者をつのり、手を挙げた40代女性利用者が担当する。彼女の普段の仕事は刈払い機を使っの除草作業や木工加工作業である。養蜂作業はニホンミツバチ飼育の為、普段は巣箱の観察が主な業務になる。採蜜作業など人手のいる作業時には2名の利用者や職員の応援を得ている。養蜂担当者はかつてアシナガバチに刺された経験があり、ミツバチに対して抵抗感があっ

たがミツバチを観察する中で「可愛く」思えるようになり日々の観察日誌を記録している。

はじめた当初、一部の職員や利用者から養蜂について理解が得られず、巣箱の設置箇所を変更するなどの工夫をした。また、新しい取り組みをすると人員を割かなくてはならないことから、B型事業の職員は今の仕事で手いっぱいなの為、ミツバチ飼育は理事長と自立して作業に取り組める軽度の知的障害を持つA型利用者が担当した。利用者アンケートの回答からも養蜂は健康的で地域の自然や環境に根差した仕事として理解し、蜜源となる花にも興味を持ちながら養蜂に取り組んでいる。またミツバチ飼育が始まったことで、施設内や近隣の樹々にも実がつき、鳥がきて、生きものの賑わい実感するようになったと理事長は話している。施設内や周辺は広葉樹が豊富で近隣にニホンミツバチの営巣もあるため、越冬群に分蜂捕獲群を加えると訪問調査時には、12群を飼育していた。その内2群から4kgのハチミツを採蜜した。瓶詰めラベル張りや、加工品の試作には養蜂担当以外の利用者も参加し、施設内での養蜂への理解が広まったという。



現地調査報告 | 株式会社リーフエッチ あまみん（就労継続支援 B 型）

株式会社リーフエッチ あまみんは2016年11月に設立し、就労継続支援B型の通所の施設として福祉サービスを行う。現在34名の利用者のうち一日平均20名前後が通っている。

あまみんでは『一般就労は難しいけど働きたい』『生活リズムを整えたい』『リハビリ専門職がいる場で体調を回復させていきたい』などなどの要望にも対応できるように、スタッフには作業療法士、精神保健福祉士、社会福祉士、当事者スタッフなどが在籍している。

農作業を中心とした外仕事チーム、ハーブティーやジェラートの製造を行う食品加工チーム、自社製品のパッケージデザインなどを行うパソコン作業チームなど様々な業務から希望の仕事を選択できる。体調を崩して休職中の方の復職支援（リワーク）や、通所が困難な方のための在宅就労も行っている。

この施設における養蜂は、平成29年JRA畜産振興事業で実施した「障がい者が参画する養蜂環境の

調査研究事業」の試験飼育に参加しセイヨウミツバチ飼育を始めた。

令和2年度からの「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」では、地元養蜂家の松中豊和氏の指導を受けてセイヨウミツバチ飼育に取り組む。養蜂作業は、就労継続支援B型のメンバーから希望者をつのり、手を挙げた20代から30代の男性3名が参加している。

その後、巣箱の内検を担当していたが別の施設に移る者や、ハチ毒アレルギーが発覚した者もいて、みつばち飼育作業は職員が中心に取り組み、利用者はおもに採蜜や瓶詰作業に参加した。

収穫したハチミツはジェラートの原料に使っている。施設代表者からは「それ以前は地元の養蜂家から蜂蜜を購入していたが、自家製のハチミツでジェラートが製造できて誇らしく思います。」「来年度からオープンするカフェの、ジェラート以外のメニューにも活かしたい」と言うコメントを得た。



現地調査報告 | しんじゅ Quality みつばちプロジェクト

社会福祉法人東京ムツミ会ファロ／社会福祉法人新宿区障害者福祉協会／
社会福祉法人新宿あした会新宿あした作業所

「しんじゅQuality」とは、新宿区内にある、身体、知的、精神などに障害のある方が働いている施設のネットワーク（以下、ネットワーク）で、新宿区障害者福祉事業所等ネットワーク事業によるもので、障害者が関わる都市型養蜂事業である。区内の養蜂家・中里伸司氏の指導で、初年度（2019年）蜂蜜収穫量は60kg、昨年度（2020年）は養蜂場を二カ所に増やしたことで125kgになった。

ネットワークの掲げる目標に1つは当事者である利用者の工賃アップである。もう1つの目標は、どこに出しても恥ずかしくないクオリティの商品づくりである。

「しんじゅQualityみつばちプロジェクト」は新宿区内にある障害者施設が共同で養蜂をして、ハチミツを収穫し、伊勢丹新宿店始め、ふらっと新宿や新宿区障害者福祉センターなど区内7か所で蜂蜜を販売しているところがすばらしい。

農福連携でしかも都会のビルの屋上でみつばち飼育が継続していること、さらに伊勢丹関連ビル屋上でも飼育しているところがインパクトの大きい取り組みといえる。新宿周辺の公園や街路樹が蜜源で、新宿御苑の広大な敷地にあるユリノキやサクラ、シナノキやエンジュなど様々な種類の蜜源が年間を通して咲いている。



養蜂作業、デザイン、瓶詰め、販売など複数の障害者施設で分担して作業を行っている。

そして事業所で協力して作業を分担しているという新しい地域の農福連携の在り方を体現しているところもすばらしい。

さらに利用者が養蜂について主体的に学び覚えようとしているところが良い。また、養蜂指導の中里氏が指導者というより、一緒に作業する感覚で優しくも時にしっかりとみつばちについて教えてくれる信頼関係が、活動が広がる大切な要因と思われる。

利用者の中には養蜂に参画し、見学者にみつばちについて解説することがあるそうで、みつばちは刺すことがある怖い生きものと思われていたのが、作業をすることで慣れ、自信をつけ、見学来場者に説明するまでの成長があったと言う。

利用者の多くが、養蜂作業が社会的に注目を浴び、様々な見学者などが訪れることで、仕事への責任感の芽生えや働くことへの自信の回復がみられ、より積極的に養蜂に携わるようになり、他の生活場面でも新たなチャレンジをするなど精神的に大きな成長がみられたと言う。



現地調査報告 | 株式会社エールアライブ

札幌ミツバチプロジェクトは2009年から、札幌市の中心地である大通り公園近くのビルの屋上で養蜂による地域活性化の取組をスタートした。現在では養蜂技術を習得したメンバーが増え、ミツバチ8群飼育している。また、昨年の実績では7群越冬にも成功し、4月頃から蜂数を増やし、順調にハチミツを収穫している。活動への障がい者の参加は2015年からで、就労移行支援事業所エールアライブの職員と利用者が週1回参加している。

就労移行支援エールアライブは、株式会社として代表取締役近藤健志氏を中心に2015年札幌駅の近くで事業を開始する。開所当初から札幌ミツバチプロジェクトの活動に参加している。就労移行支援の利用期間は最長2年で、その期間内に利用者が企業に就職できるように支援するのが目的である。開所当時から100名以上の方が利用し、毎年20人程度が一般就労へ進んでいる。

近藤代表は「さっぱちをはじめとした市民活動は意味を見出すのも本人次第かもしれませんが、福祉サービスにおける支援関係や、雇用関係だけでは得られない対等な関係性が市民活動にはあります。障害の有無に関わらず同じ市民として共に活動し、誰かの力になれる経験から、自分が誰かの力になることを実感できた方の表情に笑顔や自信が見えるようになる変化をみてきました。現在の障害福祉サービスにおける就労支援は一般就労への就職者数の評価や、事業所でどれだけ工賃を出すことができたかを評価する仕組みが主流となっています。この仕組み自体は合理的ではあるのですが、ただ働けばいいと

いうことが支援ではないと思います。エールアライブでは働くことやお金を得ること以外の豊かさを考える機会として市民活動があり、興味のある方は参加できるようにこれからも活動に関わらせていただきたいと思います。」

今年から養蜂技術を学ぶ従業員を専属で1名育成中。さっぱちの協力を得て、いつかエールアライブとしても養蜂に取組み利用者と共にはちみつ販売ができるまで技術を高めたいと構想している。

事業所の提供する仕事に習熟して工賃を上げるというより、就職してから、よりよく社会えとの関わりが持てるようにする事が大事だ。しかし、現在の福祉サービスには限界があり、それを補うために市民活動に参加する。福祉サービスやお金では解決で来ない社会や他人との関係性作りを市民活動に参加する事で身につけことが大切。また、福祉サービスの受益者としてではなく市民活動への参加者として自分の居場所や役割を見つけてほしい。」という。札幌ミツバチプロジェクトへの参加は、養蜂作業を通して、健常者と障がい者という垣根を超えて、参加者として各自ができる仕事を担当し、プロジェクトのメンバーから養蜂を習い技術を高めることができる。プロジェクトのメンバーも障がい者への対応にも慣れて、お互いを尊重しあい障がい者でも積極的に作業に参加できる体制が整っている。

現在、畑を借りて農業も事業として導入する予定であり、今は市民活動への参加であるが、事業として養蜂に取り組めるように職員の技術習得にも取り組んでいると言う。



労働参画意欲及び QOL 向上について『自立と社会参加』①

本事業の試験飼育では13事業所40名の精神・知的障がい者(以下、利用者)が施設での養蜂作業に参加し、32名が一定の養蜂技術を身に付けることが出来た。

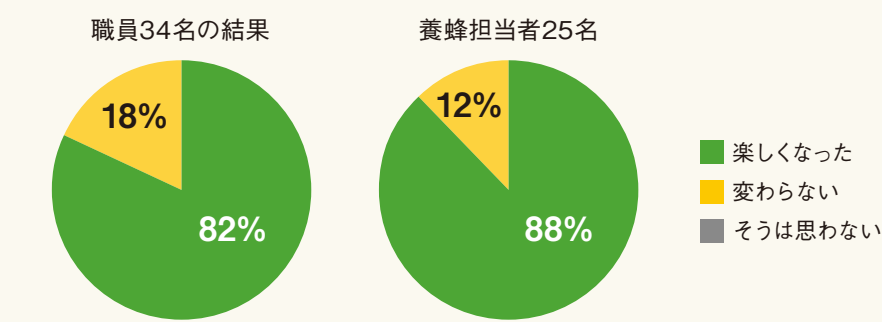
養蜂作業に参加する利用者は各施設で選抜され自らの意志で養蜂チームに参加した方であるため、「身体的健康」について基本的な日常生活

動作(ADL)が確保されていると考えられる。そこで自立と社会参加の向上について施設職員にアンケートを実施し、労働参画意欲の向上について検証した。QOL向上についてもADLが確保されている前提で、QOLの尺度として「精神的健康」について、活力、社会生活機能、日常役割機能、心の健康などの項目を念頭に調査結果をまとめた。

●労働参画意欲向上調査(障がい者施設職員へのアンケート調査)

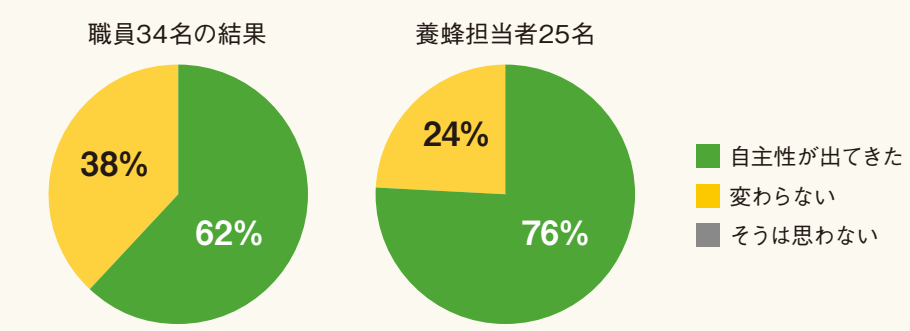
このアンケートは試験飼育に参加し、精神・知的障がいを持つ利用者が一定の養蜂技術を習得出来た10事業所の34名の職員に実施した。また、職員34人の内訳は、養蜂作業の責任者又は担当者25名、それ以外の職員9名に実施した。

問1 | 利用者の皆さんは養蜂作業に参加してから、事業所に通うことが以前より楽しくなったと思われるか？



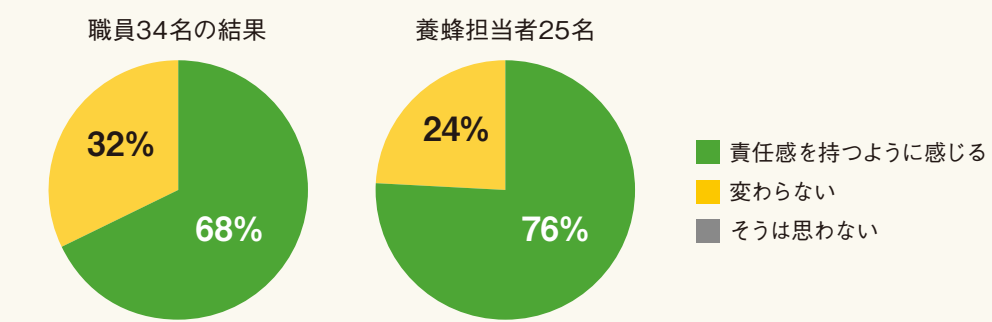
結果 | 82%の職員が、養蜂作業に参加する利用者が以前より事業所に通うことが楽しくなったと回答している。(養蜂担当職員だけの回答では88%)

問2 | 利用者の皆さんは養蜂作業に参加してから、以前より全体的に自主性が出てきたように思われますか？



結果 | 62%の職員が、以前より自主性が出てきたと思われると回答している。(養蜂担当職員だけの回答では76%)

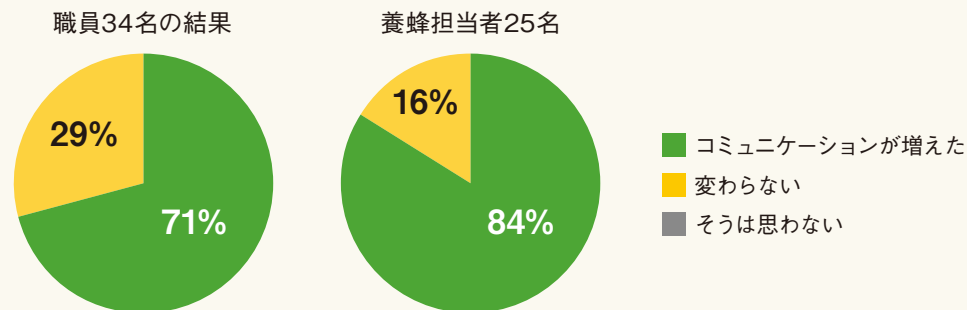
問3 | 利用者の皆さんは、養蜂作業に参加してから、以前より全体的に責任感を持つようになったと感じられかすか？



結果 | 68%の職員が以前より責任感を持つようになったと感じられると回答している。(養蜂担当職員だけの回答では76%)

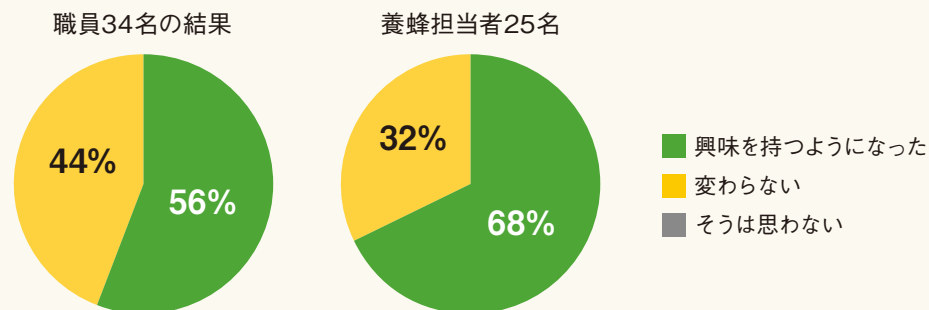
労働参画意欲及び QOL 向上について『自立と社会参加』②

問4 利用者の皆さんは養蜂作業に参加してから、他の利用者や職員と話す機会やコミュニケーションが増えたと感じられますか？



結果 71%の職員が他の利用者や職員との話す機会やコミュニケーションが増えたと回答している。(養蜂担当職員だけの回答では84%)

問5 利用者の皆さんは養蜂作業に参加してから、周囲の花や植物に興味を持つようになったと思えますか？



結果 56%の職員が以前より責任感を持つようになったと感じられると回答している。(養蜂担当職員だけの回答では68%)

考察

世間一般では「ミツバチは怖い」というイメージの中で、利用者が養蜂作業に参加し少しずつ作業技術を身に付けるにしたがって、自分への自信が心の変化に影響を与えられる。自信が付き、養蜂指導者や職員、利用者同士のコミュニケーションが増えて、その結果として職場に来るのが楽し

そうだと職員から見られるようになった。小さな「いきもの」であるミツバチを世話することで他を思いやる心や責任感、自主性などが芽生え始めたことが職員のアンケート回答からも伺えることから、養蜂作業への参加は自立と社会参画の向上に貢献し労働参画意欲の向上につながると思われる。

●QOL向上調査(精神・知的障がい者へのインタビュー調査)

利用者の半数以上がミツバチ飼育の話を施設職員から聞いた当初は「ミツバチは刺すのではないか」と言う不安を持っていた。その一方で、「屋外での農作業や草刈り作業に従事し虫にも慣れているので怖くない」や、「自然に触れ合う仕事だったので興味がある」という意見もあった。実際にミツバチの「いきもの」としての生態やその役割、扱い方の話を聞き、防護服、網付き帽子、手袋と安全な装備をして作業体験すると、7割以上の利用者が「怖くない」と回答し、残りの者も「不安はあるが養蜂してみたい」という答えが返ってきた。そこで各施設でミツバチの試験飼育を開始し、養蜂経験を重ねた後にQOL向上調査を実施した。

QOLの尺度とし「精神的健康」について、活力、社会生活機能、日常役割機能、心の健康

などの項目を念頭にインタビュー調査結果をまとめた。

活力について

養蜂作業に参加してから利用者の「笑顔が増えた」と言う話を施設職員や養蜂指導者からよく聞く。利用者のインタビューからも養蜂作業は楽しく「作業の日が待ち遠しい」という声を多く聞く。また「ミツバチを見ていると元気になる」とか、「ミツバチの事をもっと知りたい」、「養蜂は今後も続けたい」と言う者が多数いた。これまでのアンケート結果にもあった「自分に自信がついた」などと総合的に検証すると、生活全般における活力向上が見て取れる。

社会生活機能について

養蜂作業に参加する回数が増すにつれて、指導者との信頼関係が出来たことから「ミツバチの

労働参画意欲及び QOL 向上について『自立と社会参加』③

ことを質問する回数が増えた」。養蜂作業の作業の様子やハチミツを食べて美味しかったことなど、他の利用者や職員、家族や通院先の医師に話すようになったという話が複数の利用者からあった。養蜂作業を切っ掛けに、他者とのコミュニケーションが増えたことなど総合的に検証すると社会的機能の向上が見て取れる。

日常役割機能について

施設職員から「いままで休みがちであった利用者の出勤日や出勤時間が増えた」という声を聞く。また「小学校から引きこもりで人が嫌い」であった利用者が、養蜂作業の回数を重ね外部の養蜂指導者やミツバチという「小さいきもの」と触れ合う中で、「心理的な外部と接する不安が減少し活動困難が減少し活動時間が増加していった」という。また、ミツバチ作業日でなくとも「自らミツバチ

の様子を見に行く」という利用者も多い。利用者の中には「ミツバチ観察日記」を記録し、「ミツバチの絵」を休み時間に書く者もいる。このような事例を総合的に検証すると日常役割機能の向上が見て取れる。

心の健康について

施設職員や外部の養蜂指導者から「利用者の笑顔が増えた」という声から「心の健康」が見て取れる。利用者からも「ミツバチを見ていると楽しい気持ちになる」とか、「ミツバチは可愛いので見ていると安らぐ」、「癒される」というコメントが出ている。また「夜よく眠れるようになった」などの声や、「ハチミツを食べて美味しかった」とか、「ハチミツが美味しかったと褒められてうれしかった」という声も多数聞く。このような事例を総合的に検証すると心の健康の向上が見て取れる。

考察

養蜂が自然の中で無理なく体を使う作業量で、外部の指導者からも寄り添った技術指導を受けること、採蜜直後にハチミツを試食できる嬉しさや、他者からの賞賛を受ける喜びを得ることが出

来ることから、精神・知的障がい者のいきがい、健康増進を含む「精神的健康」を尺度としたQOLの向上に貢献すると思われる。

*QOLの尺度については、SF-36日本語版を参照



事業性、一般就労移行への可能性

農福連携では事業の指標を測る目安として工賃の変化を見ることが多い。今回は事業終了後に工賃や事業性、今後の事業計画についてアンケートを行った。

①養蜂作業に参加して、施設外の者から社会性を学ぶ

札幌のライブアライブではさっぱち(NPO法人 さっぱろミツバチプロジェクト)の養蜂作業と一緒にやっている。利用者にとっては外の世界で家族やスタッフ以外と接する機会。さっぱちの養蜂担当者は特別な扱いをすることなく自然と一緒に作業を行っているという。

②養蜂で、施設外就労の可能

静岡県浜松市NPOスマイルベリー施設外就労を行っている。今回の事業をきっかけに地元養蜂家塩見氏との信頼関係ができ、事業終了後は養蜂作業の施設外作業を進めている。公園での蜜源植物を植える活動を計画しており養蜂に関連する施設外就労の可能性が広がっている。

③自立へのステップ

養蜂をきっかけに施設を卒業し、新しい道へ進んだ利用者さんも存在する。施設内での事業として養蜂をスタートし、卒業して一般就労に移行した。卒業後も養蜂を続けていきたいと話している。

④B型事業所から、A型事業所へ

鹿児島県霧島市のほのぼのではB型からA型へ

移行のステップを進めている。養蜂を始めて人と関わり苦手な作業も進んで担当するようになった。自信がついて新しいことに挑戦したいと話ようになったとのこと。

この調査研究事業での養蜂活動は13施設中11施設工賃対象であった。

アンケートでは31人中24回答(77%)が工賃対象として次年度以降も養蜂を継続したいと回答があった。

一般的に職業養蜂家になるため数年先輩養蜂家について仕事をしながら学び、数多くの巣箱を管理維持しながら技術習得を図っている。今回は施設スタッフは通常業務の中で養蜂指導者の指導を受けながら養蜂技術の習得にあたった。定期的に養蜂家が訪問することで地域性のある蜜源についての蜂群管理のアドバイス、病虫害対策、採蜜時の衛生管理、販売時の表記やラベルについてなど実践的な助言が得られた。今後も技術習得に励むことで蜂蜜の収量の増加や蜂群の適正管理、商品のブランディングを行いさらなる工賃向上が見込まれる。

この事業での成果商品として、瓶詰めハチミツだけでなく、ハチミツを使用したお菓子、ドレッシングなどがあり、年間100万円の養蜂収益を得た事例報告があった。



シュタイナーの思想に基づく 児童の療育としての養蜂活動 ——シンポジウムを振り返って——

衛藤吉則

広島大学大学院人間社会科学研究科 教授
NPO 法人シュタイナー&モンテッソーリ・アカデミー 理事長

①なぜ養蜂か？

この問いについて、シュタイナーは20世紀初めに警告の意味を込めて次のように回答しています。

「人工的な養蜂は長期的に影響を受けます。その結果は、これから50年または100年後に見る必要があります」と。実際に、21世紀にかけて、効率性を求めた人工の飼料や農業、それに外来の蜂や植物の移入などによって世界各地で蜂の大幅な減少や死滅が報告されました。

シュタイナーによる著作The World of Beesの中で編者は、「ミツバチが消えたら人類はあと4年間しか生存できない」というアインシュタインの言葉(彼の言葉でないという説も)をとりあげています。実際に、私が講演でふれたシュタイナーの予言通り、彼の警告の100年後に当たる2006年ごろに欧米では蜂群崩壊症候群が広がり、2007年までに北半球のミツバチの4分の1が消えました。ミツバチは世界で生産される全作物の3分の1以上で受粉するとされますので、もし、ミツバチが全滅すれば世界の作物の3分の1がなくなり、人間の生活にも甚大な影響が出ることになります。それゆえ、今回の報告の主旨のように、蜜源を保つ意味で自然農業が必要であり、そうした自然環境の元で、利益や効率性とは別に、人間とのかかわりを大切にした養

蜂の復活が今の時代にまさに必要とされると考えます。私たちは、養蜂を自然の摂理にふさわしい形に戻すことを教育活動の一環として取り組んでいます。加えて、「ハチミツが子どもや大人の健康にとって重要である」ことを再認識し、教育活動にいまこそ取り入れていくべきと考えています。

②なぜシュタイナー学校連盟では、あらゆる施設で養蜂に取り組むことを希望しているのか？

スイスとドイツに留学したときにシュタイナー派の施設が養蜂と自然農業を軸に展開されていたことについては講演ご報告いたしました。それはいまから30年前のことです。シュタイナーの自然理解に基づくこうした取り組みは、彼が生きていた1800年代後半から1900年代前半には彼の指導のもとすでに徹底され、それは全世界に広がっています(世界では彼が展開したバイオダイナミック農法による作物や商品は広く知られていますし、化粧品のベレーダやシュタイナーのホリスティック医療もその流れから出ています)。シュタイナー派がシュタイナー学校創設100周年にあえて「養蜂の徹底」を呼びかけましたのは、自然環境を配慮しない経済優先の活動が加速し、地球環境の危機的な状況が生まれていることを危惧しているためでありま

す。養蜂についても、蜂の本質を議論することなく効率性や利益を追求する人々が増えているように思います。シュタイナー派は、大いなる自然の摂理をふまえた養蜂への回帰こそ、今日必要と考えているのです。

③収益についての考え方

私たちは、「発達障がい児の療育」として養蜂と農業に取り組んでいます。そこには「養蜂による収益」という発想はまったくありません。自然の摂理をふまえない「利益の追求」が生態系を崩し、人間生活を危ういものとする私たちは考えています。ただ、農福連携の養蜂に参加する皆様はとても温かい「蜂への愛情の心」をもたれているように感じました。皆様のすばらしい試みは、利益だけを視野に入れ、人工的でプロイラーのように行われる養蜂には進まないとの確信も抱かせていただきました。

④就労について

私たちの活動が「児童の療育」であるため、今

回のプロジェクト参加者全体に共通する「就労支援を前提とした養蜂」という見方との間にずれがあるように感じられた方があるように見受けられます。しかし、私たちによる児童への教育活動がまったく就労を意識していないかと言えばそうではありません。現在、2歳から12歳までの児童が通所していますが、私たちの組織は学校共同体のようなもので、彼らと、ある意味「家族のような関係」をもって時間を共にしています。そうした雰囲気ですごしますので、子どもたちの中には、「将来モモ(私たちの施設の通称)で働きたい」「大きくなったらモモで農業をやりたい」という児童も多くいます。また、障害の重い児童さんもモモでの生活を楽しみつつ成長していますので、私は、将来的には、彼らに、「モモの養蜂や農業やレストラン(レストランは将来の夢)」で働いてもらうことができるといふ思いを描いています(親御さんの心配は彼らの就職でもあります)。今回、障害者の施設での養蜂を進められている皆様と意気投じて



養蜂—新たな農福連携・障がい者支援への具体策

溝口 元

立正大学社会福祉学部

①はじめに

人手不足や高齢化が進む「農」の現場と働く場の確保に苦勞している「福(祉)」が手を取り合うことにより両者がWin-Winの関係を構築するという立て付けで障がい者就労支援を目指すのが「農福連携」である。すでに農作物の栽培や園芸の領域で実践されている。しかし、農地の確保や流通・経営のノウハウが必要であり社会福祉法人やNPOが独自で事業展開を行うのはハードルが高い。

一方、人と動物の関係が人の心身の健康に与える影響については、20世紀後半から研究が本格化し、動物に触れながら話すことによりストレスや血圧が低下し、リラックス効果が得られるなどの知見が報告されている。農福連携と関係する畜産や動物を介した日常的活動でも、精神的疾患やコミュニケーション障害、知的障がい、表情が乏しくなった高齢者等に一定の効果があることが知られている。

②農福連携と動物介在活動

今日、動物の利用については、その内容や用途に応じて次の3つに分けられている。

- ・動物介在活動(AAA: Animal Assisted Activity)
- ・動物介在療法(AAT: Animal Assisted

Therapy)

- ・動物介在教育(AAE: Animal Assisted Education)

これらの内、従来動物療法と呼ばれた「動物介在療法」は、人が動物と関わることにより幸福感が引き出される効果が知られている。とくに哺乳動物の体温による「ぬくもり」が作用していると考えられている。自閉スペクトラムに対する乗馬やイルカとの関わり、さらにアスペルガー症候群への改善が期待されるオキシトシンの放出の増加がこの療法でみられたという非常に興味深い知見もある。しかし、個人差や再現性、被験者数、費用など簡単に解決できない課題も抱えている。

そのため、ここでは「動物介在活動」に着目したい。動物を利用した障がい者への就労支援は具体的に言えば、養鶏、養豚、搾乳等畜産領域にみられる。そして、実際に農福連携を意識した活動が行われている。代表例が養鶏の場合である。事例として伊東養鶏場(佐賀県)がある。作業は、採卵、給餌、除糞、掃除、運搬、卵の計量等であり、そのほとんどが単純作業である。そのため、毎日の繰り返しによって習熟度が高まり作業効率も向上する。重度の知的障がい者でも十分に仕事ができる。毎日仕事があるため安定した労働力を確保することがこの業種には求められるが、期待通り着実に仕事に取り組んでくれるた

め、作業実施の予定が立てやすい。

しかし、本格的な事業経営までを視野に取めるとすれば、実施計画、用地の確保や飼育技術の習得、各種資金の調達、地域・行政との適切・良好な関係、商品としての市場・流通の確保等が挙げられる。さらに就労支援から障がい者雇用に至るまで踏み込んでいくとすれば、「改正障害者雇用促進法」や「障害者差別禁止指針」等への十分な理解と配慮はもとより、機会均等、教育・訓練、工賃・賃金、福利厚生等を検討しなければならない。

③障がい者施設での養蜂実践例

養鶏、養豚、搾乳以外に広義の畜産に含まれるものに養蜂がある。この魅力の1つは蜂蜜を試食することができることであり「蜜蜂と協力しながら美味しい蜂蜜」を作ることが利用者の自立した生活への自信の一端につながり得る。就労支援事業として養蜂を考えた際、養鶏などの畜産に比べ比較的低価格の投資や建物の屋上利用を含めた狭い土地でも実施可能なことなどから事業開始のハードルが低いことも指摘できる。

そもそも栽培される野菜や果樹の多くは虫媒の形でミツバチの受粉がなければ立ちいかない場合が少なくない。養蜂が自然の中で無理なく体を使う作業量で、採蜜直後にハチミツが賞味できる嬉しさや喜びを得ることが出来ることから精神・知的障がい者のいきがいや健康増進を含むQOLの向上に貢献し得る。

あすなろ学園 障害者支援施設母原

そこで実際にどのような養蜂を用いた農福連携がなされているのか、福岡県北九州市に所在する「あすなろ学園障害者支援施設母原」での現地調査を行った。ここは1957年に15名の知的障がい児童を預かる私塾を発端とし、障害者自立支援法の体系の下、2012年に「障害者支援施

設母原」と名称を変更している。この施設における養蜂は「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」における試験飼育の一例である。

入所施設利用者50名の内10名が農作業を担当している。養蜂作業には農作業担当者の中から希望者を募り、地元養蜂家の指導を受けて、各人の無理のない作業に20代から60代の男性3名、女性2名が参加している。自然豊かな環境を活かしニホンミツバチ3群を飼育し、さらに待受け巣箱も4つ設置している。利用者の担当作業としては、異変がないかの日々の見守りや、スズメバチ捕獲のためのトラップ作りとその設置。蜂蜜収穫、その蜂蜜の瓶詰めやラベル張りを行い、収穫した蜜蝋の精製やその加工作業も実施している。

この施設では利用者の農作業で養蜂と同時に、ビニールハウスで豆類の栽培を行っていた。この園芸と養蜂の組み合わせは利用者に自然と向き合うことを可能にし、作業者の反応も良好ということであった。

就労支援B型事業所 ほのぼの

もう一か所、鹿児島県霧島市の「就労支援B型事業所ほのぼの」も訪れた。ここは利用者6名の通所施設で農作業や、受注した洗濯作業、箱詰め等の軽作業を仕事としている。養蜂作業には洗濯を担当している20代2名の男性利用者と放課後に通所する特別支援学校3年生の女子生徒の計3名が参加していた。職員の話では、2名の男性利用者は不登校から引きこもりを経験し、他人と話すことが苦手だという。当初は仕事として担当する洗濯機の近くに巣箱があるため、なんとなく眺めていた。

その後、養蜂作業に誘われて参加するようになると、苦手であった他人との会話が養蜂指導者との間で少しずつ増えてきた。また、職員との会話も増え、通院先の医師にも養蜂の様子を話しているとのことである。

訪問した日に、蜂蜜が溜まっていたので採蜜作業を実施していた。燻煙器を使った煙をかける作業や、ブラシを使って巣枠から蜜蜂を払い落とす作業などを利用者が行っていた。この作業でも大切なことは利用者の服装の準備で、網付き帽子に、体が露出しない作業服と長靴。そして刺されても針が貫通しない手袋の準備である。また、利用者にとっては蜜蜂に刺されるかもしれない恐怖からの解放も重要である。そのようにすることで蜜蜂作業に集中し、指導者の話を聞き技術習得にも意欲が湧いてくる。その後の巣枠から蜂蜜の分離作業で遠心分離機から蜂蜜を抽出した瞬間、笑顔に包まれたようにみえた。

他人と会話することや新しい事を始めるなどから生じる緊張が苦手な軽度の精神障がい者に対して、外部の指導者から養蜂の仕方を習い、技術を身につけながら作業に参加することから、他人とのコミュニケーションを行う機会が増える。また、作業を行うことを楽しみにしている利用者は蜜蜂に触れることが日常生活の良い

刺激になっているように見える。

④養蜂に対する課題と展望

最後に米国の退役軍人支援として行われている養蜂の効果に注目してみたい。米空軍の退役軍人で養蜂に心得があった人がミネソタ州で自身の従軍中に生じた心的外傷後ストレス(PTSD)の鎮静に養蜂で効果があったことが端緒といわれる。さらに養蜂が退役軍人に対する「マインドフルネス」にも有効であったという報告もある。

実際、米国退役軍人省のブログには、養蜂により戦場で過酷な緊張感や精神的状態を強いられた軍人の退役後のPTSDやうつ症状が軽減したり、社会的なつながりが改善したという記事がみられる。日本での順天堂大学におけるアグリヒーリングの研究と関連して、蜜源となる花や果樹の栽培・管理もプログラムに含め園芸療法や森林セラピーの要素を取り入れた養蜂活動からさらに「みつばちセラピー」として発展する可能性も考えられる。



取組の魅力は「みんなの笑顔」です。

春日住夫

養蜂家

障がい者施設での取組の魅力は、利用者さん自身が養蜂に関わり、そこで見せてくれる笑顔にあるといってもいいかもしれません。

今回の事業では、コロナ禍でしたが感染防止対策をしながら、2020年11月、2021年11月に沖縄県楽ワーク福祉作業所とソルファコミュニティを訪問。また2021年7月静岡県浜松市NPO法人スマイルベリーを訪問し、現地での養蜂指導に当たりました。

沖縄の楽ワーク福祉作業所とソルファコミュニティは、前回の事業から5年間様子を見てきました。最初はミツバチが怖く、引き気味であった利用者さん、スタッフさんもおられました。それが今では落ち着いて養蜂作業に取り掛かり確認したことを自分の言葉で発信するなど、怖さを克服し自信を持って作業を行っていました。

養蜂業界では養蜂技術を子弟関係で学ぶために、どうしてもそこで学んだ技術にこだわりがちになるのですが、養蜂指導者の新垣さんと池宮さんは、利用者さんの「出来ること出来ないこと」を把握し、出来ることには自信を持たせて、出来ないことにはどうすれば出来るようになるかを考

える利用者さんに沿ったやさしい教え方でした。

特に新垣さんは、利用者さんの個性を見極めつつ、収益を上げ工賃に反映されるように、利用者さんが達成感を感じるチェック方式の記録表を作成したことで、内検時のミツバチの管理や群の状態が解りやすくなったと思います。

養蜂は持続できることが大切です。初めて養蜂を行う時は、春にプロの養蜂家が育てたミツバチを購入して、ハチミツを採ります。これは蕾がたくさんついた観葉植物と似ています。どちらもプロが育成してくれたものを開花させ収穫するだけです。大切なのは持続して育てることです。ハチミツの収穫後も継続して管理しないとミツバチの数が減ったり、ダニや病気でミツバチが弱り冬を越すことができなくなります。

プロの養蜂家は、働き蜂の多い群をつくることが収穫に繋がるのですが、それには技術と手間が多くかかります。障がい者施設での養蜂は、ハチミツの収穫量は落ちるのですが扱いやすく管理しやすい養蜂を目指し、持続化してこと大切だと考えます。これからも利用者さんに沿ったやさしい養蜂を指導できるように事業を進めていきたいと思っています。

ニホンミツバチでの 養蜂指導

舩本哲也

NPO 法人グリーンワーク

はじめに

2004年NPO法人グリーンワークを設立し、ミッションのひとつである福祉事業で取り組んだのが障害者施設や高齢者施設での「園芸療法」でした。

2014年北九州市より北九州市立山田緑地の指定管理を受託し、ニホンミツバチの飼育を中心とした「山田緑地みつばちプロジェクト」をスタートさせました。

2020年一般社団法人トウヨウミツバチ協会の農福連携事業(JRA助成事業)に参加させて頂き現在に至っています。活動は福岡県北九州市小倉南区にある「あすなろ学園障害者支援施設母原」で行っています。

ニホンミツバチの養蜂

ニホンミツバチの飼育は、自然任せの要素が多く、周辺の蜜源植物や様々な生き物との関係を十分理解して進めていくことが必要となります。また、飼育者同士のつながり(蜂友)も技術を高めるために大切です。

ニホンミツバチの養蜂は自然の仕組みを学び、自然環境に親しみ、多くの蜂友とのコミュニケーションが必要と考えています。

障害者施設での取り組み

障害者施設での養蜂は就労支援の要素と心

のケアであるセラピーがあると考えます。

就労支援においては多くの蜂蜜を生み出すことのできるセイヨウミツバチが適しており、自然に任せることの多い粗放型養蜂であるニホンミツバチの養蜂はセラピー的效果が高いように思われます。

また、飼育場の環境も重要です。現在活動しているあすなろ学園障害者支援施設母原は周辺に豊かな自然を有しており、まさに養蜂に適した場所と言えます。

あすなろ学園障害者支援母原での活動

1年目の活動にあたり以下の基本方針を立て進めていきました。

- ・利用者の立場を把握し、利用者に合わせてゆっくりと作業を進める。

利用者の性格などを理解し、急ぐことなく利用者に合わせた行動を行う。

- ・作業を通じて利用者との信頼関係の構築を図る。

フレンドリーに接することにより信頼関係を作っていく。

- ・楽しく作業できる仕組みを作る。

はちみつ味比べや蜜蝋づくり、ハンドクリームづくりなど楽しめる作業を実施する。

- ・作業はマンネリ化せず常に新しい作業を実施する。

毎月の作業に新しい要素を入れ込む。

- ・季節に応じたプログラムを立てる。

巣箱の観察の他、継箱、スズメバチトラップ、採蜜、蜜蝋づくり、キンリョウヘンの育て方、飼育の勉強、蜜源植物探しなど、年間スケジュールを組み立てる。

- ・五感で感じることでできる作業を織り込む。

見る、聞く、においをかぐ、触れる、食べるなどの要素を織り込んだ作業を積極的に行う。

- ・生きがいづくりに繋がることを目標する。

利用者が楽しみ、数多くの方に喜んで頂けることなど生きがいに繋がることを実践していく。

2年目以降は職員が主体となり、管理スケジュールを立て、毎月の養蜂作業を行っています。

活動による効果

2年目を迎えた養蜂活動において障害を持つ利用者が自然に親しむことが出来、作業の中でコミュニケーションの向上やチームワークの形成など利用者と職員がワンチームとなり一体感ある活動が生まれ、参加者全員の笑顔が増えてきています。

- ・コミュニケーションの向上

活動当初は作業内容がわからず蜂に刺されるのではないかなどの不安があり、楽しむことが出来ないように見えましたが、現在では作業にも慣

れ怖がらずに積極的に作業に取り組む姿勢が見られるようになり会話も増えてきています。

- ・チームワークの形成

利用者の作業では、ブロックの持ち上げ、継箱など出来ないことは相手のことを思いやり助け合いながら行動することが頻繁に見られるようになりました。

- ・施設職員の意識向上

施設職員も養蜂技術の習得に熱心に取り組み、2年目からは管理プログラムの立案や他施設との連携などに積極的に行動して頂くようになってきています。

おわりに

ニホンミツバチの飼育はセイヨウミツバチに比べ自然任せの要素が多く、あまり難しい管理を必要としないと考えています。また、ミツバチはとても可愛くペットとしての要素もあることから癒しの効果もあると思われます。障害者施設でのニホンミツバチの飼育は就労の可能性や養蜂に携わる者へのセラピー的效果が高いと感じています。

今後は、全国で展開されている農福連携事業とのネットワークを高め、協働の技術講習会や見学会、イベントなどにより他施設との交流も深めていきたいと思っています。



知的・精神障害者の養蜂作業前後での 唾液アミラーゼ測定結果の分析 ——養蜂が人の心を支える可能性——

千葉吉史

順天堂大学大学院研究員

本検証では、唾液によるストレス定量化アプローチを使用した養蜂作業の傾向等を検証した。

実証レイアウト

養蜂作業後の唾液採取を行い、 α アミラーゼの増減を計測する事で農作業のストレス軽減効果を測定する。対象者は障害者支援施設の利用者とした。(N=23) (知的障害および精神障害)

【結果と考察】

1:作業所到着時 2:作業前 3:作業後 4:帰宅時を起点として計測を行った。

図1左は順天堂大学が先行して行った農作業体験プログラムにおいての変化を追った一例である。(N=20:2日間の行程の2日目のみ抜粋)農作業後にアミラーゼ値は最低値となり、帰宅後の上昇においても参加前の平均値(約33)を下回っている。農作業は、このような先行研究から優位的変化が確認されている。(順天堂大学研究・農作業前後300例で平均25%減少)

養蜂では図1右のように、2~3の平均変化で、アミラーゼ値上の優位を確認できていない。傾向としては、作業中の緊張や、仕事終わりの解放感等が効果に勝っている可能性が考えられ、精神障害の利用者に関しては、服薬との関係性も考慮すべきである。ただし、養蜂作業による変化が起こった参加者が23名中7名おり(平均で37.4から32.4に変化)、利用者の適正によって

はストレスの軽減効果を期待できることが示唆された。

また自治津神経系の優位も概ね適正者には副交感神経の優位が認められる傾向があり、一般的にアミラーゼ値と自律神経状態は連動するという傾向と一致している。ただし、本検証での測定は、ピンポイントでの状態計測であり、その瞬間の安心している状態が反映されている可能性もあり、より正確な検証には図2のようなリアルタイムでの計測を行う必要がある。

上記のように、養蜂における障害者作業のストレス軽減優位性は限定的に示されている。この適性を見極めるために定性的調査などを合わせる必要がある。また、作業の成熟度による効果発露もあり得るため継続した調査も求められる。加えて、アミラーゼの計測エラー(酵素のため状況の影響を受けやすい)を防ぐため、より正確なストレスを示唆するコルチゾール等脳内ホルモン物質の変化計測を行う事が望ましい。

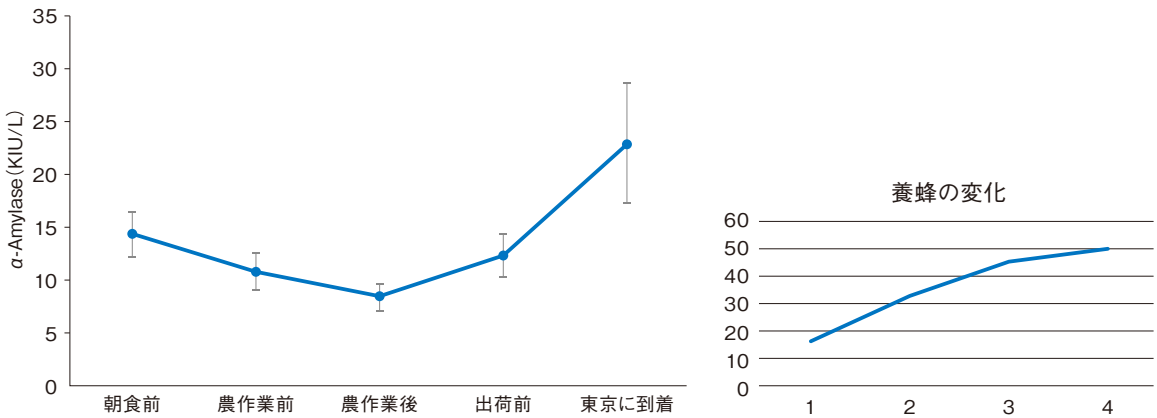


図1:農作業および養蜂によるストレス状態の変化

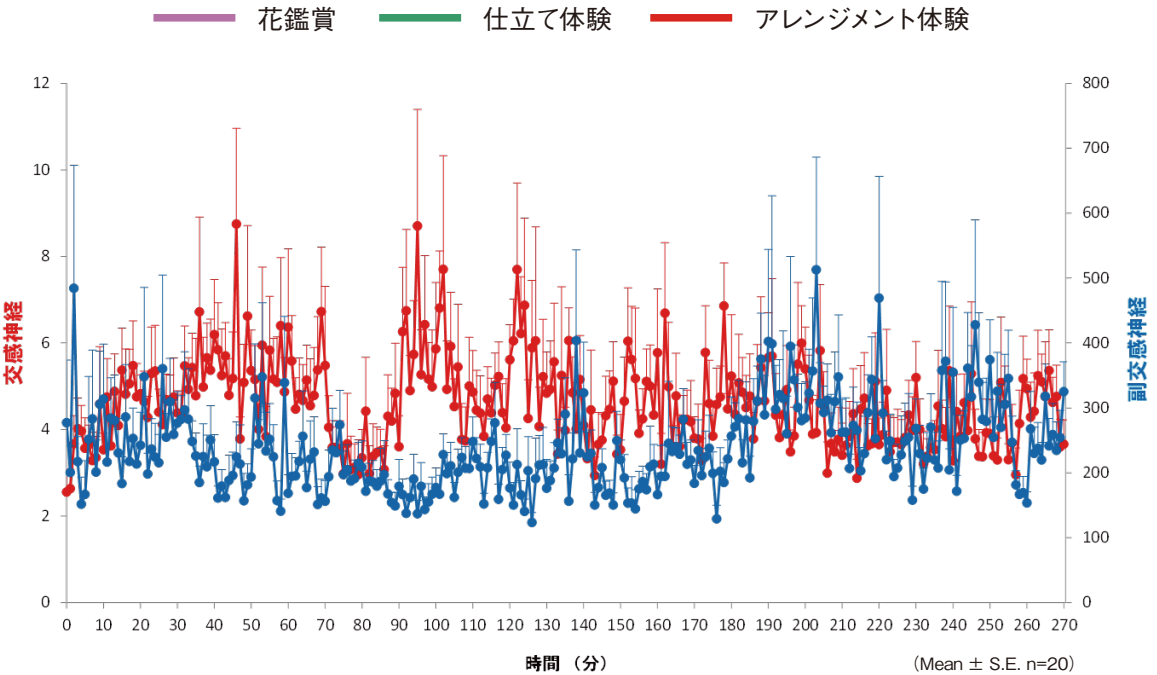


図2:自律神経の変化

知的・精神障がい者に対する 養蜂作業前後の、 唾液アミラーゼモニターによるストレス分析

中城基雄

口臭専門クリニック 中城歯科医院 院長

歯学博士・鍼灸師

目的

今まで、知的・精神障がい者が、仕事に従事する際、どの様に精神的負担を感じているか？については、不明な点も多かった。もし、知的・精神障がい者が感じるストレスとリラックス状態を「見える化」する事が出来れば、仕事に対する勤労意欲が芽生え、健全な社会生活につながる第一歩になるのではないかと、言う点に着目し、今回筆者らは、唾液アミラーゼモニ

ターを使って、養蜂作業前後のストレスチェックを行い、興味ある知見を得たので、ここに報告する。

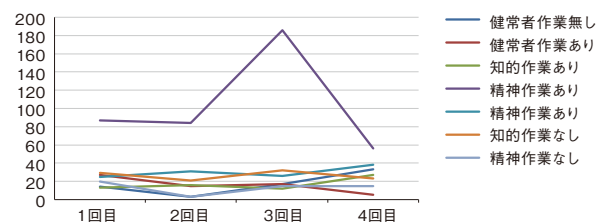
手法

健常者と知的・精神障がい者に対し、唾液アミラーゼモニター（以下、モニターと略す、ニプロ社製）を用い、養蜂作業前、作業中、作業後の定量化されたモニターの値を、30分間隔で経時的に測定し、記録にとどめた。

【結果①】施設名：NPOスマイルベリー（静岡県浜松市）

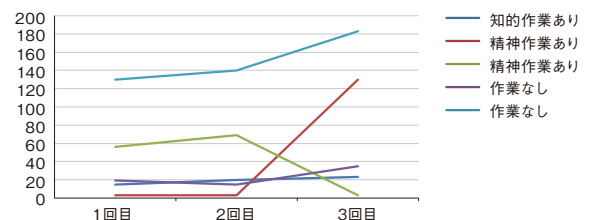
1日目【日時】2021/3/18

被検者	1回目	2回目	3回目	4回目
スタッフ作業なし	14	3	17	33
スタッフ作業あり	27	15	17	5
作業あり	13	16	12	27
作業あり	87	84	186	56
作業あり	25	31	26	38
作業なし	29	21	32	23
作業なし	20	3	15	15



2日目【日時】2021/9/14

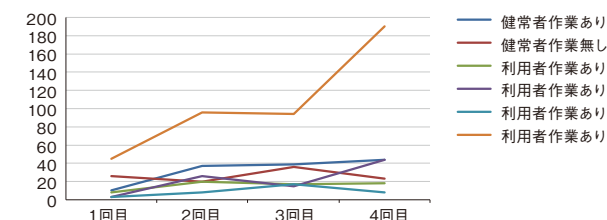
被検者名	1回目	2回目	3回目
作業あり	15	20	23
作業あり	3	3	130
作業あり	56	69	3
作業なし	19	15	35
作業なし	130	140	183



【結果②】施設名：楽ワーク福祉作業所（沖縄県南城市）

【日時】2021/5/7

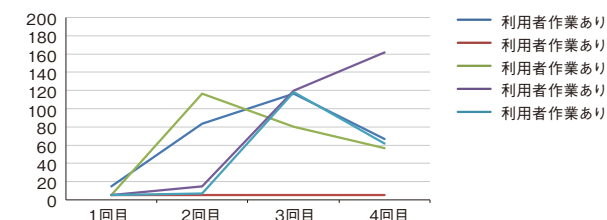
被検者名	1回目	2回目	3回目	4回目
スタッフ作業あり	10	37	39	44
スタッフ作業なし	26	20	36	23
作業あり	8	20	17	18
作業あり	3	26	15	44
作業あり	3	8	17	8
作業あり	45	96	94	190



【結果③】施設名：あすなろ学園母原（福岡県北九州市）

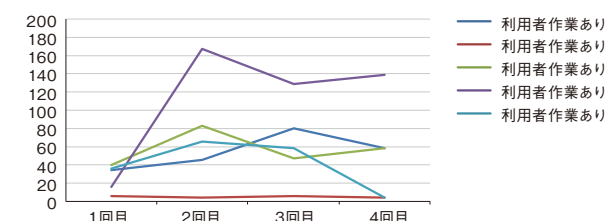
1日目【日時】2021/7/29

被検者名	1回目	2回目	3回目	4回目
利用者作業あり	9	50	70	40
利用者作業あり	3	3	3	3
利用者作業あり	3	70	48	34
利用者作業あり	3	9	72	97
利用者作業あり	3	4	71	37



2日目【日時】7月21日

被検者名	1回目	2回目	3回目	4回目
利用者作業あり	24	32	56	41
利用者作業あり	4	3	4	3
利用者作業あり	28	58	33	41
利用者作業あり	11	117	90	97
利用者作業あり	25	46	41	3



【結果の評価】

1. 利用者：25名中、20症例で、作業開始後、唾液アミラーゼ値の上昇が見て取れた。
2. 上昇傾向が確認された20症例の内、13症例で、作業終了後に唾液アミラーゼの値は減少していた。
3. 施設スタッフ4名に関しては、作業の有無にかかわらず、唾液アミラーゼの値に大きな変動は確認されなかった。

【考察】

1. 唾液アミラーゼは、本来は、炭水化物を消化する分解酵素であるが、過緊張時・ストレス負荷が高い時に上昇する事が分かっており、専用のモニターで定量化する事が出来る。
2. 唾液アミラーゼ活性は、交感神経の状態を表し、身体的・精神的な刺激に対して、比較的短時間で、分泌量に変化が出る点が特徴である。
3. 加えて、副交感神経優位になったリラックス状態では減少傾向を示す事から、精神活動の快・不快の指標となりえる。

4. 今回、施設利用者の80%の割合で、作業開始後の唾液アミラーゼの値の上昇が認められた。これは、養蜂作業を行うにあたり、真剣に取り組んでいたことによる変化である事が伺えた。
5. 一方、作業終了後、65%の割合で、作業終了後、唾液アミラーゼの値の減少傾向を示した。真剣に作業に取り組んだ後の、達成感、充実感により、精神的にリラックス状態に傾いていたことが伺える。
6. 症例数が増えていけば、知的障害と精神障害のどちらに有用性があるのかも、評価できるようになることが考えられる。それによって、本人にとって、最適な養蜂作業を割り振ることも可能になり、障害の程度によって、仕事を分配することも可能となる。
7. 今後は、試験紙を用いた検査法、データを採取するタイミングなど、実験系の統一を厳密に設定する必要性が求められる。
8. 養蜂作業は、現代社会が抱える、健常人のストレスの開放にも活用可能である事から、広くアグリヒーリングに応用できることが示唆された。

知的・精神障がい者の養蜂作業前後での自律神経測定結果の分析

降矢英成

赤坂溜池クリニック

2021年9月14日と10月11日、10月14日の3回にわたり、1時間～1時間半の養蜂作業の前後に自律神経の測定を行った。自律神経の機能の指標としては、「心拍変動の標準偏差」と「交感神経と副交感神経の比率」の2つとした。

1、「心拍変動の標準偏差」は、前後で10%以上

増加しているものを「↑」、±10%以内のものを「→」、10%以上減少しているものを「↓」とした。

2、「交感神経と副交感神経の比率」は、5:5(6:4～4:6)が望ましい比率とされており、それに近づいた場合は「↑」、不変だった場合は「→」、離れた場合は「↓」とした。

①9月14日(於・静岡県～通所施設)作業直後↑1、→1、↓4 1時間後↑2、→4

	作業前		作業直後		1時間後	
	心拍変動	交感/副交感	心拍変動	交感/副交感	心拍変動	交感/副交感
A精	29,1	4:6	25,1↓	9:1↓	28,9→	5:5→
B知	15,8	9:1	13,3↓	9:1→	17,2→	9:1→
C知	11,3	5:5	17,1↑	8:2↓	21,0↑	7:3↑

②10月11日(於・東京都～通所施設) ↑6、→1、↓3

	作業前		作業直後	
	心拍変動	交感/副交感	心拍変動	交感/副交感
A精	41,4	6:4	31,2↓	5:5↑
B精	18,2	6:4	77,6↑	4:6→
C精	18,5	6:4	51,7↑	5:5↑
D精	19,5	7:3	15,1↓	6:4↑
E精	34,2	7:3	27,5↓	6:4↑

③10月14日(於・茨城県～居住施設) ↑1、→5、↓2

	作業前		作業直後	
	心拍変動	交感/副交感	心拍変動	交感/副交感
A精	53,5	5:5	49,8→	5:5→
B精	87,1	5:5	77,7↓	5:5→
C精	52,4	5:5	38,5↓	5:5→
D精	89,4	4:6	117,9↑	5:5→

*精…精神障害を持つ者 知…知的障害を持つ者

【考察と展望】

1、障害の種類や障害の程度について、障害が中度の「知的障害者の居住施設」よりも、軽度の方が多し「精神障害者の通所施設」の方が↑が多かった。(②施設、③施設比較)

2、9月14日の①静岡県の施設において、「直後」だけでなく「1時間後」にも計測してみたところ、1時間後の方が良い傾向がみられた。「直後」は、養蜂作業の感覚が残っている一方、緊張や疲労がある時期と考えられる。しかし、その緊張や疲労は、1時間後には回復し、むしろ改善傾向をもたらし傾向がみられた。

3、今後の展望として、

①作業技術が身についている養蜂作業では、作業後の大きなストレスの増加は見られず、むしろ休憩後に緊張や疲労が回復するとストレス改善傾向もみられることから、養蜂が精神・知的障害を持つ者の就労支援に有効だと考えられる。

②比較的軽度の精神障害の方が多し「通所施設」の利用者の方が、養蜂作業でのストレス緩和効果がより大きく見られるという傾向から、養蜂作業が障害者のケアだけでなく、「一般人のストレスケア」としても活用できる可能性が示唆された。ぜひ、継続して検討したいと考える。



養蜂や関連する農作業 (蜜源植物栽培・管理)での 心のケアについて

末松広行

東京農業大学教授

JRA畜産振興事業の「障がい者養蜂での労働環境創出調査研究事業」が実施され、その事例集が出されることになりました。とても意義のあることだと思います。

農福連携についての理解が高まってきていて、様々なところでいろいろな取り組みが始まっています。障がい者の方々の雇用の方が提供され、農林畜水産業の発展にも寄与するこの取り組みはさまざまな方面にWINWINの効果をもたらしています。

農業の側で求められることが様々であるように、障がい者の方の特性も様々です。今回、養蜂という事業分野の特徴が農福連携が効果的に進むことにとっても効果があることが明らかになったことは素晴らしいことだと思います。

作業をする立場からすると、どういう作業がしたいか、どういう作業が健康や収入に効果があるかについてはなかなかむづかしい問題です。養蜂の作業については、針をもっている昆虫であるミツバチを扱うということで、その作業はとっつきにくいという点もあります。

今回の調査の結果を読んで感じたことは、最初から「養蜂の作業をしたい」という方は多くありませんが、一旦作業をはじめてみるとその楽しさややりがいを感じる方がとても多いということです。

防護服を着ることにより刺される心配を取り除き、適切な指導の下で作業をされた方々は徐々に作業をこなせるようになり、やりがいを感じるようになっていく例がたくさんあることがわかります。また、それぞれの方が、その様子を記録したり、ご家族に報告されたり、コミュニケーションの増加にもつながっていることも素晴らしいことだと思います。収穫したハチミツを食べた方から「美味しい」というコメントももらえれば、さらに励みになるようです。

作業の前後では自律神経の測定結果も良くなっているということですが、これは達成感もたらす好影響だと思います。かねてより言われていたことだとは思いますが、改めて養蜂は精神障害や仕事や生活に大きなストレスを感じる方の心のケアに役立つ可能性があり、養蜂のセラピー効果は期待できると思います。

今後、蜜源となる花や果樹の栽培・管理もプログラムに取り入れたり、園芸療法や森林セラピーなどとも連携するとさらに効果的なプログラムができていくのではないかと思います。

今後とも、このような取り組みが進むためには何が必要かを追求し、そのためにみんなで協力する動きを進めていければと考えています。

今後の活動を期待いたします。

あどがき ～養蜂セラピーへの期待～

ドイツの思想家シュタイナーは100年前から「発達障害児の療育」に自然農業と一緒に養蜂を取り入れてきました。また、アメリカやカナダで退役軍人の心的外傷後ストレス(PTSD)を鎮静させるための養蜂プログラムがPTSDやうつ病の軽減に効果があるという報告があります。そこで我が国においても精神・知的障害を持つ者への「心のケア」と「自立と社会参加」に養蜂が貢献するのではないかと確信し、就労支援事業として「養蜂」について調査研究を実施しました。

調査研究の結果、養蜂にはミツバチ飼育作業だけでなく、ハチミツ分離作業や瓶詰め、ラベル張り、菓子などの加工品作り、その販売など、多くの作業が伴い、それぞれの障害特性を活かした仕事がありました。職員と利用者が協力しハチミツを収穫できた施設では利用者の工賃にも貢献しています。また「自立と社会参加」やQOL向上への貢献についても、その傾向を確認することが出来ました。さらに医療関係者の指導を受け養蜂作業前後での唾液アミラーゼ値や自律神経を測定し、養蜂作業でのストレスや、ストレス緩和効果についても測定しました。その結果、軽度の精神障がいを持つ利用者に無理のない養蜂作業でのストレス緩和効果がより大きく見られるという傾向から、養蜂作業が障害者のケアだけでなく、「一般人のストレスケア」としても活用できる可能性が示唆されました。(赤坂溜池クリニック降矢英成医師監修)今後、この調査研究事業の成果を踏まえて「養蜂

セラピー」の調査研究へと発展させて行きたいと思います。

謝辞

この調査研究事業は、社会福祉の専門家である立正大学教授溝口元氏の指導を受けて実施しました。各施設利用者の養蜂指導については養蜂家春日住夫氏の指導を受け、各地の養蜂指導者の皆様と協議を重ね実施しました。また養蜂作業でのストレスやストレス緩和効果についての検証では順天堂大学医学部大学院研究員千葉吉史氏、唾液アミラーゼ測定においては歯科医師中城基雄氏、自律神経測定とその評価については赤坂溜池クリニック院長降矢英成氏の協力を得て実施しました。ご指導いただいた皆様に心より感謝申し上げます。また、試験飼育に参加した全国13カ所の就労支援事業所の施設職員および利用者の皆様、試験飼育参加施設以外で訪問調査・取材にご協力いただいた施設職員及び利用者の皆様にも心より感謝申し上げます。皆様のご支援・ご協力のお陰で調査研究事業を実施することが出来ました。また、日本中央競馬会(JRA)畜産振興事業の助成をいただき心より感謝申し上げます。皆様、ありがとうございました。

令和3年12月吉日

一般社団法人トウヨウミツバチ協会
代表理事 高安和夫
事務局職員一同